

246
42
23

毛利十一代史

第三十册

自寶曆十三年
至安永元年

毛利十一代史

第三十册

英雲公記

毛利十一代史卷之七十六

大田報助編



英雲公記七

明治
43.10.25
寄贈

寶曆十三年癸未正月公萩城ニ在リ新年諸式例ノ如シ

十九日藏元兩人役檢給五兵衛手回組ニ加ヘ當役手元役用所役兼務ヲ命シ矢倉頭人

ヲモ兼シム井上與左衛門當役手元役用所役兼務ヲ命ス熊野源右衛門用所役ヲ免シ

原田小右衛門ニ後任ヲ命ス奈古屋五郎右衛門ニ藏元兩人役ヲ命シ遠近方ヲ兼シム

右筆山田九郎太ニ遠近方ヲ岩政六郎右衛門ニ右筆本役ヲ命ス直書役中島市郎兵衛

ニ右筆副役ヲ命ス大田忠右衛門ニ直書本役ヲ命ス大檢使役諫早七左衛門用所暫役

ヲ免ス

廿七日西城閣老松平周防守對客定日回狀左ノ如シ

三日 七日 十一日 十八日 廿一日 廿五日

正月

松平周防守

晦日松原十郎右衛門ニ用所役ヲ命ス

二月二日ヨリ四日ニ至ル觀光公十三年忌大照院ニ於テ法會修セラル公參拜高野山
へ大阪留守居ヲシテ代拜香奠銀十枚納附セシム同日江戸青松寺ニ於テ法會修行米
二十俵銀三十枚納附

九日明倫館釋菜公參謁壽老ヲ召シ賜物有差阿武郡山代村ヨリ百十五歳ノ老人出ツ

十日柿並市右衛門ニ地江戸大記録方ヲ命ス用所役格ト爲ス後祖公代大記録方ヲ再
ス股

十五日渡邊太郎左衛門熊谷圖書井原主税ニ組頭役ヲ命ス

十九日桑原善次數年自他國役勤務精勵ニヨリ従前ノ給米ニ併セ其身一代米二十五
俵給與

廿日大頭役佐世六郎左衛門ニ手回頭ヲ井原孫右衛門ニ大頭役ヲ命ス

廿一日毛利讚岐守政苗七男寅之進嫡子トナル

廿六日諸臣風紀ニ關シ内訓左ノ如シ

頃日諸士之中藝者を召寄手おとり等仕らせ遊興になつみ其外振廻等繁多相聞る
甚風俗不宜候何ぞ廉有之節女儀向にて萩居合之替女座頭召寄候儀は無據儀も可
有之候へ共當時重き御儉約中下以差詰之事候へは可成程は可相愼候依之御目付
方へも被仰付候條内意申聞せ候やうにとの御事

三月七日ヨリ八日ニ至ル法林夫人三回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラル米二十俵銀二
十枚納附

七日毛利志摩守徳山ヲ發シ十八日伏見ニ至ル

三月日不詳出雲神魂社司秋上中務往年天樹公ヨリ神魂大社へ寄附行平ノ太刀朽損
修復ノ乞願アリ銀五枚下附

十三日隼人嫡子志道一格外三人寄組嫡子ニテ近年臨時出務ヲ命シ苦勞ニヨリ各銀
二百目下附

廿五日諸國銅山検査發令左ノ如シ大目付同狀

諸國銅山是迄不相稼場所並前々出銅有之當時休山に相成候場所可有之候付御料は御代官私領は領主地頭より遂吟味相稼出銅有之様に可取計候尤出銅有無共吟味之趣御勘定所へ書附可差出候

右之通可被相觸候 三月

前令ニ對シ提出書左ノ如シ

覺

一銅一萬二千三百三十三斤餘

但去午ノ年中吹立之出銅之分

右奥阿武郡藏目喜村前方出銅有之候處中絶仕寶曆二三之比より少々宛稼有之候分一ツ書之辻御座候事

一美禰郡長登村銅山去年以來相稼候處當春以來銅無之白目計吹立仕候事

右兩郡當時稼仕候 分

一銅山古跡三箇所

但明木村にて先年掘跡有之候處いかやうの趣にて留り山に相成候哉年限不相知分

一同一箇所

但山田村にて一箇所同斷

一同一箇所

但川上村にて三十箇年以前出銅有之候へ共其後餘分水たへ稼相止候分

右當島宰判

一同一箇所

但於福村之内先年稼仕其後相止候分

右吉田宰判

一同一箇所

但山畑村之内同斷

右徳地宰判

一同一箇所

但仁保上郷白水村にて去る亥年銅山稼仕候處其後相止候分

右山口宰判

一同一箇所

但根笠村にて先年相稼寛文中相止候分

一同一箇所

但添谷村先年相稼候處天正之比相止候分

右前山代宰判

右銅山古跡有之宰判之分

濱崎 前大津 先大津 船木 小郡 三田尻

都野郡 熊毛 上關 大島郡 鹿野 奥山代

右先年より銅山一向無之宰判之分

覺

一銅山一箇所

但長州阿武郡藏目喜村にて前方出銅有之候處中絶仕近年少々宛稼仕候得共

一向立用候程之儀無御座候事

一同一箇所

但同國美禰郡長登村にて去年以來相稼少々出銅有之候處其後山捨り候事

右松平大膳大夫領内銅山前斷之外銅山古跡所々有之候へ共先年以來稼不仕候尤

末家毛利能登守毛利志摩守え配地之内出銅場所無御座候以上

八月 御名内 山名字 右衛門

廿八日公瀬戸崎邊巡行四月二日還城近年邊海魚蝦ノ獲モノ鮮少所在ノ漁戶等皆窮
乏屢官庫ノ賑郵ヲ仰クニ至レリ萩町ノ商某乞テ越ヶ濱ニ芝居劇場ヲ開キ土民救惠
ノ一助ニ供セントス三月下旬ヨリ開場六月上旬ニ至ル城下ノ士族亦頻年法制嚴肅
別ニ憐慰ノ路ナキヲ以テ皆許シテ縦觀セシム

近年諸臣皆家計困乏ノ狀ヲ以テ祿高百石ニ米二石ヲ準シ救與セラレ

四月四日今度朝鮮聘使大阪ヨリ江戸迄ノ人馬賃錢宗氏ニテ引負トナシ金九萬七千兩ヲ給フ徳川十五代史

五日毛利内匠ニ巡郡ヲ命シ不在中用務當役三人順番ニシテ之ヲ勤ム

廿日鷹司右府兼中惟保君重就公分姫房君出生

廿五日毛利能登守匡滿姉好子重就公松平山城守信將ニ嫁ス可ノ旨許命アリ初内藤

許嫁ス未タ嫁セ
スシテ信旭卒ス

廿八日弘法寺邊ニ騎射ヲ調習シ當役及諸官吏皆觀覽セリ

五月五日本梨勘左衛門ニ目付役ヲ命ス

十四日先是檢地ノ事結ヲ告ク此ニ於テ一大革新ノ法ヲ敷ントシ公當職毛利内匠ヲ召シ手書ノ令條ヲ授ク令條ハ即チ改革ノ綱領ヲ列記シタルモノナリ之ニ付スルニ施行ノ細則ヲ以テス今其梗概ヲ案スルニ貞享以來七十餘年土地ノ肥瘠廣狹變革不少今回悉ク皆檢覆其餘贏ヲ舉テ其損失ヲ償ヒ上下皆均平ニ歸スルヲ得タリ而レトモ數百頃ノ新拓及積年不毛ノ熟地ニ復スルト亦官庫ヲ二途ニ分チ剩餘ヲ別庫ニ貯

蓄シ以テ不虞ノ用ニ備フヘシ當役吃然法ヲ建テ制ヲ守リ本米銀トシ混淆セシムルコト勿レ又日凡物滿レハ溢レ易ク贏餘アレハ驕心生シ易シ寶曆九年定ムル處ノ石高ヲ以テ儉約省略國用一歲ノ常度トスヘシ云々九年所定蓋高
十五萬石ナリ

今回瘠土狹地ヲ細檢シ租稅ヲ減スルモノ高二萬石歲入ノ増加スル高六萬石之ヲ別庫ニ備ヘ名テ撫育豫備米銀トス此月撫育方吏員數人ヲ任撰セラル倉庫ヲ諸郡内十所ニ造營シ貯蓄ノ便トスコレヨリ子本増加シ遂ニ古來所傳ノ軍用金ノ匱缺ヲ償復シ又凶荒ノ賑卹及幕令課出ノ巨金皆此儲蓄ニ依ルコトヲ得タリ親書判物左ニ記ス

申聞條々

今度土地評之儀貞享之例ニ隨ヒ加フルニ圖籍ヲ以テ小村帳繪圖是ナリ具ニ別記アリ兩國中土地之肥瘠廣狹七十餘年ヲ隔自然ト變スル所多シ有餘ヲ以テ不足ヲ補ノ古法ヲ用ヒ民間生産頗均フシ今年今月役人功竣依之自今以後之法ヲ定メ有國ノ要ヲ嚴重ニ申付所左ノ如シ

一別記に有之追損永否戻り等之新物成合而若干別記其詳也此物成引分之法を定め自今所帶方へ混雜すへからざる事

但引分之儀此度新規之事に付嚴法を以手堅可被申付候事

一 所帶方は去る寶曆九年定る所之仕組帳請之物成を以自今凡之分限と定め年々の諸入用其分に過る事莫大に及ばず當職役身に引懸儉約省略之手段を盡し日夜心を用ひ定る分際を以是非ともに内外濁々も相調やうに其時々之職役並裏判役其外手元所帶方役人思慮を盡て可計策事就中所帶方役引受之者は此段職分之第一たり

一家來中並諸郡よりの馳走多分之出來數十箇年打續今之分に候ては甚不相濟事一於于時重き公役之儀は國中之人力を盡し相勤る事古よりの定例此後以勿論たり雖然其年の豊凶に隨ひ土民の力時として可難合盡之事

但此兩條は別而當職役常に心を用ひ不可有怠儀なり尤當時は所帶方至極之差岡之事に付近年之内此存念宜敷可相調儀にあらずといへ共引請之諸役人

常々此意を心頭にさし挟み其謀を設る時はたとひ速に其効あらずとも不善に至らす徒に所帶日用之繰合のみを職分と心得遠き慮りを忘れ其儘に差置時は終にいつ迄も今の分たるへし因茲當職役より所帶方役人中に至迄追年此儀に思慮を凝し士農の衰病は國の病因と成儀を思ひ心を安すへからざる事

一 此引分之物成を以所帶方自不足を補へき事必然の理に似たりといへとも甚以可加遠慮儀なり所帶方請之物成満足之儀は災之基なり此理辨さる者は政事に參はるへからず

一年來所帶方危急差岡といふを以國政姑息の儀多し是只所帶方のみを要事とし大體に怠る所なり尤當時は所帶方程大切成儀無之といへとも諸役人皆爲其心得之故を以時として國政急務にあらずと心得要務に怠り所帶方豐饒之期を俟は後年殆國政の闕て補へからざるに至らんとす則此度引分之法を申付る趣後年迄も執政の職を掌る者は深く考へき事

一時として爲差儀も有之嚴法をも破るべき時は此儀伺を以如此といふ事古今の例なり是機に臨ては其理有之事といへとも役人共思惟有べき儀なり譬は此度引分の物成如此嚴重に申付置處後年所帶方不足差間の時役人共此物成を目當として手段を緩せにして是非此物成を以不償時は所帶方作略盡き忽危に至ると手詰の伺に及ふ時は此法に悖といふとも引分之法を敗り免許するの外なし然は後年引分の法を敗るは免許之非に似たりといへとも其實は手詰の伺による此等之儀自今以後職役以下其事に與る者之可有心得事

一今度土地押之儀所帶方補のため企たる儀にあらず近年國中之窮巷只様民戸も減し其外追損と號し物成高之減したる事既に萬石に及ふ則國中土地之弊るなり是捨置へからざるの儀にて土地押を企るは不得止にいつる處なり追損永否戻り等は其自然の餘慶なり此儀全所帶方の智計より出るにあらず向後以所帶方役之者は此儀無之以前と心得相定る物成を以其職を守るへし若後年此物成を目當とする役人は作略に怠り不任其職ものなり

一諸郡之代官役以下此以後は就中其人を撰て可申付猶常以其在役之者の邪正に心を付其才之優劣を考或は褒貶賞罰之道速なるへし城下手近き役人は其能不能忽明らかなれとも諸郡之儀は常に心を付さる時は則執政の過と成へし

一諸郡之奸曲と民間の疾苦をは政を執る者常に心を付て知るべき儀なり

一諸郡之事を勤る者民事に委からず農家之情を知らずして在勤せは後年に至り諸郡之盛衰大に片寄り其災又起るへし後年土地押之儀は容易に行はざる儀なり大凡百年を期すへし依之諸郡之儀は國政之要務諸郡自今の災は役人之可爲怠者也

右此度土地押相關候付自今國政要務をしめし近憂を招くへからざるか爲に引分之法を堅く申付所也然上は此掟後年以敗と不敗とは當職役之功不功たるへし向後當職役交代之度々此一通を早速に請渡し新役は此條々を會得して在勤之覺悟可爲奉職之急務者也

寶曆十三五月十四日 御書判

毛利内匠殿
其外進當職中

一追損永否戻り石之事

但當年之義は先達而伺之筋に任せたる趣も有之候へとも作法之仕立は當年より申付勿論來所務よりは嚴重に引分申付候事

一手置銀之事

但只今迄所帶方之兼帶たるにより物繰なる銀子をも近年申付る作法に不相備畢竟有に随つて取盡し無ければ止む義と見ゆるに付今度引分方に申付事
一倍役並減少石等之事

但先御代被相定所之家法有といへ共所帶方より引渡之義を相滞り此等繰之義所帶方之補と相成道理無之候へ共風義悪敷家法は敗れとも所帶方之理に迫り家法追々廢せる事笑止之義なり依之先御代被仰付家法再與申付度此度之新役屋へ引請申付年々現物所帶方より渡方之時直目付より見届可差出事

一山銀之事

是亦郡方より寶藏へ納る作法に近年相成候へとも是また所帶方毎々引當として拂底迄は取出して當用を辨する風儀ゆへ今度之引分方へ請させ候事
一諸郡入替米毎年締り開届之事

但是は現物城下え取越義にあらず此義に付先代御黒印を以被仰付たる旨も有之處に伴之風義故いつとなく其旨に違ひ不締り相成たる様に相見候何とぞ御黒印之旨相立候様に申付度此度之役人より毎年締り可申付事

右庶々只今迄不埒之流例を改今度申付候撫育方引受に可申付候條夫々之役所より請渡之辦法手堅相調候様可被申付候近年以繰之引分之義をも申付る通りに不相成所帶方一方之便りに相成と云物位之義にても無之此物成無之時は所帶方夫ゆえに大事に及ふといふ道理も無之事に候處に流例之風儀不改故に候今度手堅く相改候事

一此度之新物成は餘分之義に付決而所帶方引當之存念可有之候此儀所帶方償之

ため申付たる事にて全無之所帶方より毛頭氣付無之事に付此以後以所帶方役人は此義無之以前と心得銘々引請之職分を以盡忠節候様手堅可被申聞候今度土地押之儀申付候義は今之通にては國政大に關たる事出來すへきと氣遣捨置かたき筋有之候故此義を存立頃日漸成就之期に相成去々年已來内外え懸我等心勞も如形にて此節大に令案堵事に候依之後日御方役座並裏判役手元役所帶方役人迄も此引分之法に相障り候沙汰筋仕る時は我等心勞無詮相成道理に候いつとてもかやうの嚴法能行はるゝは夫々其人に有之事に候條當分の役人は猶更此以後交代之者共えも手堅可被申傳候

一右引分之物成此以後無據要用有之於于時所用候は、我等より可申付候下より引當同等之義全以可爲無用事

一此以後請拂有之上は毎年勘定締りの仕法吟味被申付追而可被相伺候尤勘定は取分可爲密事に付見届之事直目付役え可申付事

役人定之事

一別紙條々申付通り引分之所務全以所帶方え不可混雜義所存有之申付處也仕組折合候までは我等直にも差圖を加へ度存事に付則當分より役人定め申付事に候

附箋ニ 役名之儀は撫育方と唱させ候事

一引分之所務引請之役人として小村帳方頭人布施忠右衛門都野正兵衛兩人共直様此役義可申付候三戸四兵衛義も直様本締役として可申付候此外今一兩人も可相加候や下之存寄をも被承何分追而可被相伺候別而密用之事に候へは付屬之役人も願くは少人數たるへく候匹夫之手子吟味有へき事

但右頭人之義は新役座之事に候得共諸事所帶方同格に可被申付事

附箋ニ 此度引分之物數も有之事に候へ共此外は請渡之度々直目付役手子を指出見届可申付候本文新物成請渡之義は廉有之事に付直目付役自身に藏元令出勤立會見届候様申付にて可有之事

但此米銀餘分之事に候へは現物不殘藏元に取揃候様に不相成事も可有之に

候現物同前之繰りを以請渡之仕法あるへき事

一此度之引分新物成毎年春定辻を以諸郡より令上納一應は所帶方請に備る義之由然は所帶方より毎年時節日限を極早速無遅滞引渡之法を定させ右申付候役人於藏元可請取之此時直目付藏元立會之沙汰可申付事

近年國元江戸方共に仕組申付りまた無間合義に付諸事折合之期に至る迄は直に差圖を加へし此引分之義も同様に暫く直之物數寄を以申付義も有へし此本文は永々以家法とす當分より堅行はれ候様に嚴密に可有沙汰事

十五日諸臣祿高百石二十五石掛ヲ給與セラル令文左ノ如シ

御意之旨覺

累年不勝手家來中よりも打續き重き出米申付候段至而心外の事候然處當年の儀も無據公役差湊ひ去年早魁旁家來中地下へも餘分の出米申付候ても大段の不足取續き絶手段候由内匠より追々申出候付不得止事又々出米申付るの外これなし此節に至り差つとひ候段於下も勘辨仕遂馳走におゐては可爲祝着候委細當役中

より可申聞事

覺

年來御所帶御不勝手に付御家來中も無據重き出米被仰付候段至而御心外被思召當秋以後之御仕組且御家來中御馳走米減少之儀當役中へ再往被仰聽種々遂會議候處近年非常之御造佐入差湊利去秋御國中夥敷早魁凡現米四萬石餘之落米大坂御運送米餘分及不足萩御用米も他國米御買入相成且信使一件嵩之御造佐入彼是御繰卷必至と絶手段候故當番之儀も重き出米之外無之其段及御聞候處御所帶御差問之段逐一被聞召上候へ共御家來中一統に差詰候儀候へはいつれの筋にても御馳走出米を減し上御遣用之儀をは此上隨分省略可被仰付段重疊被仰付高百石に付現米十五石當りの出米被仰付候付於下も御差問之御時節被致勘辨何とぞ繰卷之工面を以且々にも取續可被遂御馳走候事

一愁訴願事近年之通先被差留候事

一出米段分別紙に有之候事

右銘々被存此旨組支配中へも能々可被申渡候以上

未五月

毛	梨	尖	益	毛
内	頼	外	越	織
匠	母	記	中	部

十六日寶藏武具方高須三郎兵衛ニ京都留守居役ヲ命シ遊佐四郎左衛門ト交代セシ

ム小村帳方頭人布施忠右衛門都野庄兵衛ニ撫育方ヲ命ス

十九日貯蓄粗ニ關シ幕令左ノ如シ

先達而置粗被仰付候萬石以上之面々辰巳兩年置粗之内辰年粗之分は去年年米を

以詰替置候に付當年は其儘差置已年粗之分其國々におゐて勝手次第相拂候様可

被申付候委細之儀は御勘定奉行可被承合候 五月

右之通可被相違候

廿日山内主馬ニ寺社奉行ヲ命ス手元役坂次郎右衛門ニ大坂留守居役ヲ遠近方高杉

又兵衛ニ當職手元役所帶方兼務ヲ命ス藏元兩人役栗屋六郎右衛門ニ札座頭人兼務

ヲ命ス

廿一日手元役兼郡奉行羽仁五郎左衛門手元役ヲ免ス

廿三日開作地分與ニ關シ訓令左ノ如シ

御家來中先祖以來拜領之開作地分與之儀は不容易事候得共本末間は願之品によ

つて各別之儀候條少々分與は只今迄之通可被差免候其餘前々之趣も有之候得共

被相改向後は其家に男女他え有付之便にも相成分與相願候は、御僉議之上可被

遂御許客候此外如何様之斷雖有之不被逮御沙沙候事

但分際之乘開作餘分取立之心遣相頼一廉其功有之者え開作少々分與之儀は各

別之儀先例も有之事候付斷之趣によつて可被遂御分別候事 未の五月

同日撫育方ノ財源ハ全ク藩庫從來ノ公租外ニ在ルヲ以テ本部ト其經濟ヲ異ニス因

テ當職毛利内匠ヨリ伺書ニ對シ公親筆指令左ノ如シ

奉親候事

此條本文之通可被相心得候尤只今所帶自不足可捨置儀にて無之毎年仕組帳一所務切改之定入用之廉々え當於其役所々々減少之儀無緩様可有沙汰事

一今度土地押被仰付小村帳繪圖相調諸郡田呂押合之程地下折合迄も宜敷相聞申候追損永否戻等之新御物成之儀は引分可被仰付之旨にて爲御國政厚御思召之旨を以御判物被成下謹而奉得其旨候御條數之廉々分明之御事に御座候へは差而御窺等申上落着仕度と奉存候儀も無御座候尤寶曆九年被仰付候御仕組帳請之御物成を以自今凡之御分際と相定御内外且々も相調候様私以下引請之役人中日夜心遣可仕之旨被仰出只今御所帶御自不足も御座候得は此度之新御物成を以償被仰付候者先一應は御自不足も無之事足り候様にも相成可申候得共自他御遣用素際限無之物に御座候得は追年又御自不足之様に相成彌増之御差間之儀にも至り可申哉何分にも御請物之際限を堅被相定御遣用之過不足を相考御儉約省略に由斷無之様にと重疊御思召之旨を以御文章巨細之被仰出則夫々

之役人中えも申聞候處孰も奉得其旨候將又御引分之廉々仕法等之儀手堅吟味仕追而御窺可申上候事

此條本文之通勿論に候引分之廉々え不相障事に候は、たとひ定分際請物引當之外たり共隨分心遣を以似合敷手段を盡させ間を可被合事

一此度被仰出候御引分之廉々え不相障筋之儀に御座候は、於于時之御借米銀之類又は作略を以臨時に取立候米銀等をは隨分心遣仕せ御間を合申にて可有御座候是以引當之儀は定御請物を以年月を経候とも返濟道付等之積りを以相關可申候畢竟定る御分限御請物を以始終之繰合御間を合せ候道理に御座候得は此度之御條目に少も相障候筋無之儀と奉存候於私此段落着仕罷居申候得共還而交代之者えも相傳仕候儀に御座候得は一存之落着も難仕儀と奉存候

此條本文之通凡近年之仕組之法に可被相心得候今度引分之儀申付るといへとも徒無用之金銀を貯んとするにあらず委敷は言語筆紙不能盡之志厚役人は自然と此意をさとり存念を成就すへし政は役人を撰に在り

一於于時公邊に付重き御役筋之儀は御國中之人力を被用御間を被合候儀古より
の御定例此以後迄之儀も下以其心得に罷居候儀御座候右之外御内輪之儀に御
座候とも目立候程之御臨時御入用筋出來仕候は、手段計策等之儀にては御間
も難被合可有御座御事御座候へは下以其考をも仕儀尤其御入用高之輕重も可
有御座候得共廉有御臨時と候ては此度之御引分を悉被用候ても行届可申儀に
ても無御座候得は兎角相應之御馳走を御請被成候外無之儀と奉存候此等之儀
も繁々有之儀にても無御座に付其時々御伺をも申上儀に御座候へ共役人中心
得にも相成申事に御座候故奉候

右之廉々請御意之旨所勤仕度奉存候間被仰窺可被下候以上

寶曆十三年五月二十三日

毛利内匠判

毛利織部殿

益田越中殿

穴道外記殿

梨羽頼母殿

同日境忠右衛門ニ遠近方ヲ命ヌ

廿六日一門益福老中其他拜領獻上ニ關シ訓示左ノ如シ

御一門益田、福原、老中、其外共

右之面々御格式にて御腰物拜領獻上之節は代付凡先格を以沙汰被仰付來候然る
處往々は御道具御不如意之時節も可有之於下も差問候事に付向後之儀は應物通
只今迄之代付物位無混雜被立置前後少々宛代付多少之分は御有相を以拜領被仰
付下よりも其心得を以獻上被仰付儀も可有之候條至其期可相伺候事

一御末家方岩國之儀も御格式有之儀候得共向後は右見渡を以沙汰可被仰付候事
覺ニ記

右之通被仰出候下御僉議凡之所前々夫々え拜領獻上之物位を取左之通位を立
進御聞伺之通被仰付候に付本文之通被仰出候事

獻上 一三枚五兩ヨリ一枚五兩迄

御一門中

拜領 一三枚五兩ヨリ二枚迄

献上 一三枚ヨリ一枚迄

益田、福原

拜領 一三枚五兩ヨリ一枚五兩迄

献上 一二枚五兩ヨリ一枚迄

老中、御手、回頭並志道、桂

拜領 一三枚ヨリ一枚迄

同日井原彦右衛門誠姫裏老ヲ免シ奥番頭格トナシ新御殿用務ヲ命ス曾禰孫左衛門ニ誠姫裏老役ヲ湯淺伊右衛門ニ目付役ヲ命ス

晦日江戸仕組當初ヨリ苦勞ニヨリ高州平七へ金十兩羽仁五郎左衛門ニ金七兩粟屋

六郎右衛門ニ金五兩下付

六月朔日松平山城守信將好子へ納采

同日江戸仕組當初ヨリ擔當苦勞ニヨリ井上與左衛門外三人へ各紋章上下一具下付

佐田茂兵衛外二人へ銀子三枚下付給領小村帳用務苦勞ニヨリ高洲平七宇野五郎兵

衛ニ各紋章帷子一羽仁五郎左衛門ニ紋章上下一具下付

二日落合喜左衛門既仕組結了ニヨリ永代無給通ニ加フ

三日公東親發認三田尻ニ至リ朝鮮使送迎船修營ヲ檢覽セラレ中國路陸行公信使摩接ノ川務

勿擾ヲ以テ之ヲ幕府ニ乞ヒ參府ノ期ヲ延テ今日ニ至レリ

廿日針醫西村意真近年雇ニ採用御長屋ニ付セラレ老年精勤ニヨリ米二十五俵給與

河村義現同前

廿三日好子松平山城守信將ニ嫁シ三田新堀邸ニ入ル

廿四日諸大名ノ適妻ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

萬石以上之面々相應之縁組可仕儀に候處縁組不相願罷在候面々も有之候無心得

違一度は相應之縁談取組候様可被致候尤再縁之儀は勝手次第之事候

右之通寄々可被達置候 六月

七月九日公着府

十六日吉田代官氏家矢之助外十七人任免アリ此交迭ハ土地廣狹評完了ニヨリ代官

精撰ノ結果ニ依ルモノナルヘシ

十七日與番頭長井武兵衛ニ直目付ヲ命ヌ杉山十左衛門淺野十藏ニ與番頭ヲ命ヌ

廿四日公足痛ニヨリ城内用杖乞願允許アリ

廿九日將軍鷹捉ノ雲雀三十ヲ賜フ

八月九日江戸留守居國司主税老中ニ任ス

廿一日ヨリ二十二日ニ至ル養心夫人二十五回忌大照院ニ於テ法會修セラル

九月十二日ヨリ十三日ニ至ル泰桓公三十三回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラル米二十

俵銀十五枚納付公參拜十一日十三日ニ至ル東光寺ニ於テ法會執行

十八日列子重就公第君夫人ノ養ヒトナス

廿三日政二郎君重就公第十丈夫申告書提出セララル

廿八日毛利秀之助三田尻田島ニ於テ所有之開作地二百町ノ内百三十町餘開拓竣成

ニヨリ浮米ニ替ヘ殘六十町餘開作未濟上地ニ對シ貸與銀乞願アリ浮米替ヲ許シ貸

與銀ハ詮考中ニテ開作地ハ公收セララル

十月七日萩城内厩一宇燒失

十一日毛利讚岐守女松平軍次郎嫡子松平左近へ定婚出願ノ通報アリ

十三日毛利讚岐守家臣宮木清左衛門尋問ノ件ニ關シ讚岐守差控ヲ申告ス

十四日藏元兩人役吉田孫右衛門死ス

十七日先是會計胥吏職罪アルモノ數十人ヲ檢シ斬首切腹囚獄流罪沒祿減知降等ニ

處セララル是日又上勘所頭人本橋檢使諸郡代官等數十人犯罪ノ輕重ニ由リ隱居減祿

運塞ヲ命ヌ寶曆十三年同十四年

十八日將軍鷹捉ノ雁二隻ヲ賜フ

廿一日松平安藝守初入國ニヨリ使者ヲ藝州ニ遣シ太刀一腰馬代金一枚樽代ヲ遣リ

祝セララル

十一月十一日所帶方粟屋六郎右衛門藏元兩人役兼務ヲ命ヌ

十三日淺草邊東本願寺接近或ハ下谷柳原等出火ノトキ柳原藤堂和泉守邸前へ人數

出スヘキノ旨佐竹次郎小笠原伊豫守命ヲ奉ス東本願寺朝鮮使旅宿

同日毛利能登守初入部願書左ノ如シ

毛利能登守儀當年在所御暇被下置候様於私奉願心得罷在候處此度朝鮮人御馳走御用被仰付候故差控罷居候然處能登守儀未年若旁在所仕置等之儀不束奉存候故來年如例私儀御暇被下置儀御座候は、其節能登守儀も御暇被下置來々年私一同に參府被仰付被下候様於私奉願候猶委細之儀は彼者より可申上候以上

十一月十三日

御名

附札ニ 能登守儀願之通當年在所え之御暇被下にて可有之候

廿一日天皇即位德川十五代史

此月朝鮮來聘ニ付通行道筋ノ法制ヲ定ム德川十五代史

廿三日拳場近傍飼犬ニ關シ大目付ヨリ通達左ノ如シ

御拳場近邊向後は一切飼犬不仕其外來犬野犬は見當次第捕捨候様以來共其通相心得候様との御事

廿七日是日禁裡即位ノ式アリ後櫻町 使者毛利伊勢ヲ上京拜賀セシム 伊勢十月二十日 萩出發

十二月五日毛利能登守幼齡ニツキ公長府家政ニ管與セラレシモ能登守成年ニ達ス

向後能登守へ直裁スヘキ示命アリ

六日徒士目付石津七郎右衛門外四人給領小村帳ニ關シ巡回探知苦勞ニヨリ各銀六十目下付

七日宇治茶師竹田紹且家續以後米五十俵繼續給與乞願允許アリ

十六日毛利吉五郎毛利山城守廣豐 元公曾孫吉川左京養子許命アリ

廿七日朝鮮使節赤間關ニ抵ル阿彌陀寺ニ館ス享應使毛利秀之助船手長村上采女等十餘人周旋款待如例舊記ニ依ルニ延享五年及ヒ寶曆十三年兩度ノ朝鮮使ニ關スル大知ルヘジ幕府カ後來受檢ヲ會略セシヨル我邦惣費用ノ

晦日粕谷修外三人數年近侍精勤ニヨリ各銀五枚下付

明和元年甲申六月二日 改元正月公江戶ニ在リ

朔日夜朝鮮使赤間關解纜三日上ノ關着船五日出帆九日蕪州ニ移ル

十六日令ス德川十五代史

一朝鮮人え詩作贈答並筆談等に罷出候者一通り對話之趣意相認候儀且古來より
二儀兩説之疑敷所杯を或風雅を以贈答仕候様成事は不苦候得共一分之學力を
以自負之ため異國をなちり彼國之事を學候として我國をあさけり候様成筆談等
第一國體を不辨筋違候様に相見候林大學頭にては天和以來弟子共差出候節詩
作贈答計にて筆談等は決して仕間敷段堅申付來候依之此度出席之者共右に準し
詩作之唱和は格別國體を心得違候様成無用雜事筆談不仕様可相心得候尤右筆
談並詩作唱和之度々役人其席え立合不洩様取集林大學頭方え不殘差出候筈に
候且又筆談之儀相願候者之外給仕等に罷出又は相願難罷出もの共は筆談出席
之者なと相願候て詩文贈答仕來候者も有之様相聞候此儀は猶以如何成事に候
間相願候人數之外は詩作贈答堅仕間敷事候

晦日香川治右衛門數十年勤務辭職ニヨリ銀十枚下付

二月四日奏者番兼寺社奉行毛利讚岐守政苗罪アリテ免職閉門セシム下野國千本長
安寺ト同國鳥山天性寺トノ爭論訴出シテ自カラ檢斷セス家士等カ私ノ謀ラヒヲナ

シタルヲモ糺明セス又中奥番士千本左京カ長安寺ニ荷擔シ政苗カ家士ニ贈リ物シ
テ請托スル所アリシヲ以テ左京カ家士一人ハ追放セラレ政苗カ家臣宮木清右衛門
ハ遠流ニ處ス

同日毛利讚岐守ハ公實兄ノ故ヲ以テ差控ヲ稟申セラル

五日内藤勘右衛門石州銀負債ノコト願ハレ審問ノ結果家祿高四百十四石四斗三升
三合ノ内高八十二石八斗ヲ減シ隱居ヲ命シ領地沒收浮米ヲ給與シ嫡子丹宮ヲ奉仕
セシム

七日關老傳命左ノ如シ

松平大膳大夫

出仕等被差控候様先達而相達置候へ共最早不及其儀候

十八日朝鮮使着府東本願寺ヲ旅館トス

廿日神田火延燒日本橋ニ至ル

廿五日毛利志摩守廣寬弟專之助就馴ヲ以テ養子トシ家督ヲ繼シメンコトヲ願フ

廿六日毛利志摩守廣寬江戸麻布邸ニ卒ス年三十法名泰叟院

廿七日朝鮮國使引見舊式ノ如シ德川實紀

二月下旬ヨリ五月上旬ニ至ル前小畑村ニ劇場ヲ許サル

三月六日ヨリ七日ニ至ル融芳夫人二十五回忌天德寺ニ於テ修セラル米十俵銀三十枚納付

十三日松平伊豫守江戸ニ於テ死去江戸三郎萩山口三田尻鳴物停止三日間

廿六日鷹司輔平惟保君ト同ク吾藩京都三條邸ニ來ル享應アリ

四月八日ヨリ九日ニ至ル長壽夫人七回忌東光寺ニ於テ法會修セラル六月三日ヨリ

四日ニ至ル瑞聖寺ニ於テ法會執行米二十俵銀二十枚納付

十五日公歸國暇ヲ賜フ

同日毛利能登守ヲ吾邸ニ招キ錢別ノ料理ヲ差ム刀一腰三代金馬一枚三枚馬一匹袷羽織二熊泥障

三掛干鯛一箱ヲ進セラル

十八日毛利能登守匡滿始テ入部暇ヲ賜フ五月二十三日歸邑

十九日毛利能登守歸邑中出萩乞願認可アリ

廿一日毛利專之助就馴家督二十八日拜謝病ニ因リ名代堀丹後守登營

廿三日公江戸發駕中山道ヲ經京都ニ抵ル

同日木村九郎右衛門京都銀子方役中逃亡ニツキ家祿沒收

廿八日世子水痘ニ罹ル

廿九日妙玖寺萩城二曲輪乘輿乞願允許アリ

四月日不詳當職毛利内匠辭職留任内匠及加判裏判へ傳命書ヲ授ク其文略

五月十七日佐々木七郎父平太左衛門心亂ノ趣ニツキ家祿沒收

十九日朝鮮使節歸途上ノ關泊船二十一日馬關着船二十四日出帆小倉ニ移ル

廿八日日光山靈屋竣成正遷宮完了ニヨリ諸大名惣出伺

同日公歸城

廿九日毛利謙岐守退職後差控稟申セシニ其儀ニ及ハストナリ

六月十三日閩老營中ニ於テ寶曆ノ年號明和ト改元ノ旨ヲ傳フ國內二十九日發令

十六日諸臣ノ俸祿當年ハ四分ノ三ヲ賜ハルヘシトノ布令アリ

廿五日無給通野村治右衛門罪アリ家祿減少隠居ヲ命ス小身トナリ養子ナキニヨリ

地徒士通ニ降等乞願允可アリ

同日能美吉右衛門ニ所帶方ヲ命ス

七月二十三日鍼醫西村意菴父意真死去給米法ノ如ク公收セラル意真生前命令ノ旨

モアリ鍼治外科兼業ニシテ雇ニ採用其身一代米二十五俵給與

廿八日佐竹善左衛門新御殿年寄役勤務七十歳ニ及フ數年苦勞ニヨリ金十兩下付

八月十七日訓示左ノ如シ

御城内杖依願被差免候面々痛所等快候は、可相届候快氣無之候共御在國御留守

中を限改而又々可願出候事

廿三日安田六右衛門供歩行ニ採用六十三年勤務ニヨリ銀三枚下付

廿六日山口代官高洲平兵衛山口御茶屋管膳短期落成ニヨリ金十兩下付

九月三日賊子實宗殿ニ妻ス未嫁而重慶年ス

松平肥後守容綏ニ嫁ス可キ旨許命アリ

十五日毛利能登守出萩長府十六日城中ニ招キ饗宴ヲ賜フ又鹿狩鷹野ノ遊及騎射ヲ

調習セシメ之ヲ款待セラル

十月三日長府領吉見浦出火家數百五戸焼亡

十日河北九左衛門ニ目付役ヲ命ス

十一日火消役ヲ戒ム發令左ノ如シ大目付回狀

定火消人數之儀近來人數不足に相見其上役場中間之儀は與力同心は不致差圖火
口え掛り候者少く手明候者多く於火事場不埒之儀仕候者も有之様相聞候畢竟手
配惡敷火口え懸り候者少く候故右體之儀も有之候以來は御定人數之内手配り定
之通譬は火口え掛り候者何人水之手え掛り候者何人と申様振分相懸け與力同心
も火口並水之手え定之通相分り人數差引致差圖手に付爲相働候は、消防之手配
りも宜取締可申候勿論場所におゐて不埒之儀不仕様急度申付與力同心並家來共
へも申付不埒之儀有之候は、相糺させ急度申付候様可被致候以來不埒之儀有之

候は、町方並盜賊改同心共召捕候筈候且亦定火消消防之場所え時宜に寄町火消
掛け候節是又爭論等無之互に打込消防致し候様可被致候畢竟何れにも早速消留
候儀專要之事候

右之通火消役え申渡候間防大名役場中間之儀も右之趣に準し急度申付候様防大
名之面々え可被相達候十月

十三日供步行増山六左衛門五十六年勤務ニヨリ銀三枚下付

十九日吉川左京經永卒ス年五十三法名偏照院

十一月二日取退無盡及三笠付ヲ禁ス令文ハ寛保元年訓令ニ同キヲ以テ略ス

八日夜萩川添中間通又七宅屋上出火三軒屋ノ町南詰九軒焼失十月以後諸所火サシ
物騒ニツキ改而火用心沙汰之アリ草會年表

廿六日公遊獵生雲村ヨリ鹿野村ニ至ル鹿三頭ヲ炮撃セラル

十二月十一日武家從者ヲ戒ム發令左ノ如シ大目付回狀

惣而供廻り之風俗目立不申様作法能申付於途中も互に片付通之隙に不相成かさ

つに無之様前々より度々相觸請人共えも町奉行より急度申渡置候得共近比かさ
つ成も有之様相聞候彌前々相觸候通堅被相守之かさつに無之様可被申付候家督
坏に相成候年若成衆中は面々之物數寄有之候付自然と供廻り風俗なと目立かさ
つに相成候左様には有之間敷事候條急度相止可被申候且又徒之者間違に召連候
面々も有之往來之隙に相成候是又左様無之様可被申付候

右之通可被相觸候十二月

十六日神保與右衛門朝鮮使一件三田尻船舶其他非常盡力ヲ以テ諸費用減少ニヨリ
銀五枚下付

廿日平岡半左衛門發狂兄井上忠左衛門ニ疵ヲ負ハセ同宿三戸五郎左衛門ヲ殺害セ
シ科ニヨリ半左衛門家祿沒收

同日萩町人武田嘉平次曾父以來數年米銀提出大年寄格トセラレシニ今回撫育方へ
米千五百石馳走ヲ遂ルニヨリ其身一代上方町人格ト爲ス

廿三日公來年參府來々年賜暇歸國ノトキ木曾路旅行請願認可アリ

廿六日内訓左ノ如シ

非常之儀令出來搦番被差出候砌殿様上々様方御通關被成候節御先供其外通關之儀差懸り御差問之儀も有之候は、御供方より御陸士目付下横目等を以可申達候條其者其場所に留置證人にして通せ可被申候此外は只今迄之御沙汰無相違候事右之通内意申聞せ候様との事申十二月

廿八日吉川吉五郎經倫家督

閏十二月七日手元役井上與左衛門ニ矢倉方兼務ヲ命ス

八日訓示左ノ如シ

此節萩廻にて間々鐵炮打候もの有之由相聞え不謂事に付御目付方えも急度被仰聞候へ共平人よりも右體之者は見當り次第相糺可申出候其品によつて御褒美をも可被下候事

十六日先是三田尻南田鳴ノ海鹵開拓ノ議決ス

十一月十七日歟始本月七日潮留竣成然ルニ今朝暴潮突起堤防壞決セリ後大濱ナト

相府年表

月日不詳亦間關伊崎開作竣成

毛利十一代史卷之七十七

大田報助編次

英雲公記八

明和二年乙酉正日公萩城ニ在リ

十五日引田成方法ニ關シ訓令左ノ如シ

御先々代御一門老中勝手逼迫之面々爲取續御扶持方成之御僉議有之候得共休息
にても時々御用も有之衆御家來中一統之難被及御沙汰享保九年初而引田成之仕
法被相定候此時迄は上下之差詰今程之危急に不至願出候衆も稀々之儀堪忍とし
て被渡下候手取石之外餘石を以借米銀相調石役之出米御家來一列を外れ候筋無
之儉約之實儀相立たる儀候處於于今は定法之手取石並奉書借利且納領分修補夫
飯米其外諸拂石引除其餘にては石役之出米令不足持越借に相成追年は上納勿論
之儀ながら當分相定出米之内不納に相當り其上いつとなく引田成多人數相成御

所帶之根積令相違候加之御仕成居形等引替候時は自然と儉約相立儀候得共不及其沙汰大概常に不相替彼是時宜に不相叶段年來御思召之旨有之今般仕法改被仰付候事

一引田成内堪忍として本知四箇一如定例被立下候事

一本知四箇一之外高千石に付米四十石宛引添石被仰付來候得共向後之儀は二十石宛可被遂御了簡候事

附御役被仰付候衆は對造作入可爲舊例之通候事

一老中本知二千石不足之衆張石共に高二千石之四箇一手取被仰付來候得共自今以後本知之四箇一並高千石に付米二十石可被渡下候事

附御役所勤之衆は張石高を以手取可被仰付候事

一領分修補夫飯米只今迄之員數三分二可被相立候事

一上方隣國奉借之儀引田成内は利且納約束之石數減少之斷於下も仕方可有之儀候難相斷趣も候は上より其吟味往々可被仰付候事

一年始御歸城父子共に御目見可被仰付候御兩殿様え御祝儀如定格可被差上候此外一切出仕不被仰付御祝儀不及被差上候事

附在役之衆は常之通たるへく候然共嫡子之儀は休息之衆可爲同様候事

附り御留守年之儀も年始登城御祝儀被差上候儀父子共に可爲同前候之事

附り上々様方へ年始計御祝儀常之通父子共に可被申上候事

附り於子時御祝儀之儀は時々可被仰出候事

一老中嫡子之儀は諸事御扶持方成御仕法之格に可被相心得候事

附在役之老中嫡子之儀は年始御歸城御目見被仰付御祝儀をも如定格差上尤御留守年之儀も年始登城御祝儀可被差上候此外は大概御扶持方成同様之心得に可被仕候事

一御一門衆家老之内御謠初之節被召出候に對し二の郭内木履被差免儀に候得共引田成内は不及其沙汰候事

附在役之衆は常之通たるへく候事

一御廻禮被差止御祝物をも不被下候事

附在役之衆へは可爲常之通候事

一御名代役其外御用被仰付候節は只今迄之通上使可被遣候此外於下何そ趣有之節被成上使來候儀は被差止候事

附在役之衆は可爲常之通候事

一居宅修補之外新作事被差留候事

一休息之衆は本式臺可被鎖置候事

一嫡子娘縁組之儀は常之通婚禮をは被差留候事

一幼年之衆亂舞被致裕古候共囃子は可有用捨候事

一御城下之人張御一門本家嫡子共に若黨三人老中二人たるへく候事

附り御一門衆合羽箱一荷押之者可有省略候事

附り老中衆竹馬同斷

附り在役之衆は可爲常之通候然共下之心得を以減少勝手次第被仰付候事

一又家來旅行鍵持せ間敷候事

一御名代役其外御用付所勤之節可爲常之人張候事

一御園役に付ては縦令常例無之候共其科可被遂御了簡候事

一火事場出勤且人數差出候儀被差除候事

一女儀衆御案内之儀は御兩殿様元年始御歸城計上々様方えは年始計如定格御祝

儀可被差上候此外之儀は一切御案内被差留候勿論人張等之儀も凡常之三步二

程に可被相心得候事

右條々被仰出候惣而引田成之儀は誠に不得止願出被遂御許容候上は内外自立候程之儉約可有之儀候處只今迄も規則不被相立候故下之意得上之御沙汰筋も容易之様相成候段甚不宜との御思召を以此度仕法被相定候且向後引田成一代兩度迄は可被差免候旁可申聞旨候以上

明和二酉年正月

梨 頼 母
外 肥

益越中
毛織部
毛内匠

廿二日所帶方山田吉右衛門ニ作事方ヲ命シ作事方服部半七ニ長崎開役ヲ林三郎右衛門ニ目付役ヲ命ス

廿六日吉川吉五郎初テ出萩二月十四日歸邑

二月朔日本年諸臣ノ俸祿稅率輕減セントス然ルニ誠子出府婚嫁ニ松平尾前守其他臨時ノ諸費一時支辨シカタク不得止祿高百石十八石懸ヲ給セラルヘシトノ發令左ノ如シ

御意之旨覺

累歲不足之勝手向其上近年廉有造佐入打續き其價雖令難溢家來中も逼迫之事に付種々工面を以去年は馳走米少々有免をも申付るの處此度於誠婚姻之一途且當秋年寄衆招請其外臨時之入用相重り其仕向一向絶方便無據當年之儀は増出米申

付るの外無之候條差湊ひの趣下にては相辨遠馳走におゐては可爲祝着候委細當役中より可申聞候事

十一日友子重就公松平土佐守豊雍ニ嫁スヘキノ旨許命アリ

十五日誠子裏老曾彌權左衛門ニ黒印令條ヲ授ク

十七日諸臣請暇ニ關シ伺指令左ノ如シ

列紙

此段先は病氣等に相限儀候下差岡之筋を以御斷申出候は、被遂御僉議無據儀は被差免追而趣被仰越候様にとの御事

奉伺候覺

田舎御暇二箇月迄は依御斷之趣被差免候及三箇月候ては一向不被差免御仕法候尤前月之下旬におよひ罷越病氣其外無據儀にて三箇月え越候理之筋於有之は往來共日數六十日を限可被遂御許容段御肩書御黒印之旨候然上は右日數之外御暇可申出儀にて無之候得共以來若病氣保養且就用事道理至極之譯を以御留守中連

も六十日餘之御斷申出候時は沙汰筋差聞申儀に御座候此段如何可被仰付哉

申九月

同日訓示左ノ如シ

鐵炮札より内にて落猪取留候節役人見請無之候得は申出不仕儀と下にては心得居候様相聞甚不埒之儀候向後右體之儀有之節は早速勘場え申出請差圖候様に被仰付候事

三月二日益田越中廣堯死去

五日公發駕東觀宮市ヨリ仁井令ヲ經大濱新拓地巡視中國路ヨリ京都ニ赴ク

公駕四本松通過之トキ前大津殿敷村百姓清兵衛ナルモノ乘輿前ニ出テ直訴セン
トシ一首ノ和歌ヲ投出スル直訴人ヲ查問アリシニ別ニ惡意アラズ狂人ト認メ放免セララル

江戸立のかとを祝して民か来て

君の恵は春の山かな

四月七日公着府

十七日東照宮百五十年祭アリ公紅葉山神廟參謁此日公諸侯皆衣冠束帶又使者ヲ日

光山ニ遣シ太刀一口ヲ獻セラル國內水上山及大寧寺ニ東照宮祭事ヲ修セララル如例

五月六日鷹司輔平輔平重就公奉勅日光山參謁江戸ニ抵リ谷川ノ威應寺ニ滯泊セ

ラル是日我邸ニ招キ發應アル

七日ヨリ六月ニ至ル弘法寺境内ニ於テ劇場許サル春來小畑ニテ芝居及越ヶ濱定市

開設アリ

十一日大城ニ謠舞ヲ奏セラル日光山祭事完了公列侯ト皆登營菓子一折ヲ獻セラル

十四日中屋敷内新辻番所勤番ニ關シ訓示左ノ如シ

御中屋敷内新辻番所

一番所之儀兼而被定置候通晝夜無闕如可相勤候事

一此辻番所之前他所人通り扱不相成儀候間無緩氣を付差留可申候事

一御藏廻り八春舍御庭内諸廻番間相を考見廻り随分氣を付萬一居滞り候者於有

之は可相答候事

一八春舎之小門諸廻番其外にても往來以後若明居候は早速締り等可入念候事
 一御園之廻り居留り候者於有之は無滯罷通り候様氣を付可申候事
 一夜中四時已後往來仕候者於有之は外人は勿論御屋鋪内之面々たり共其旨趣相
 尋趣次第御陸目付え可相達候事
 一近火又は何ぞ非常之儀有之節は早速御殿其外物筋へ可相達候事
 右之廉々は勿論惣而不依何事夜中は別而無油斷可相守候事

西五月

十五日岩之允君諱ヲ徳元ト稱ス

十九日鷹司輔平歸京我藩士卒三十餘人ヲ出シ之ヲ送ラシム輔平來ナルトキ亦士卒三
十餘人ヲシテ之ヲ迎ヘ

ムシ

二十四日訴願人等ノ義ニ付奥向ノ聲頼箇間敷義無之様元文五年ノ令ヲ申戒ス徳川

十五代史

六月朔日世子始テ將軍ニ謁見公毛利能登守同伴登營拜謁セラル世子ノ隨從家老二

人亦拜謁世子ヨリ將軍ニ太刀一腰縹紗五卷馬代金十兩君夫人ニ白銀五枚又將軍ノ
 世子ニ獻物アリ又公及家老ヨリ獻物如例

八日直目付長井武兵衛死ス

廿四日澄子重就公
第十子松平下總守忠刻嫡子駿河守忠啓ニ妻ス可キヲ約ス

廿七日後房中ノ口門通行ニ關シ訓示左ノ如シ

當	役	御手廻頭	出	頭	奥	番	頭
御直目付		御小姓中	大	納	戸	御	側
御側醫		御廊下番	御	針	御	外	科
御用所		御直書	御	茶	堂	大	檢
御勤方		御駕籠奉行	當	役	筆	者	御手廻リ證人
御次番		御手廻頭筆者	大	納	戸	手	子
御密用開次役		御直目付手子	御	次	坊	主	衆
直	横	目	打	廻	リ	四	役
							之
							者
							大
							納
							戸
							下
							手
							子

御小納戸下手子

水

仁

夜着番

御鳥伺

御奥掃除番

右之面々前々御奥中ノ口御門往來相成來候此外出入不相成候事

附御裏年寄公儀人御目付之儀は御用次第に往來不苦候右之外非常之儀は各別之事

一他所人之儀は一切御門之内入申間敷候若御屋敷之勝手不案内相見候は、孰え罷越候哉相尋先方敷可申候事

一御奥取繕等之節作事方役人立肝煎大工郡夫日用等御門出入之儀先達而御奥より通達有之分は格別無左候は御門に待せ置御奥開合之上通し可申候事

一御納戸え町人細工人等御用に付罷出候節も開合候而通し可申候事
右之通御門番能々相心得締り可入念候若相違有之は番人越度可被仰付候此段可被申聞候事

同日亦坂今井臺預地廻番ニ關シ訓示左ノ如シ

一赤坂今井臺御預地晝夜廻番等之儀御引渡最初都合にては其沙汰相成今以緩せ等無之儀には候へ共其預地内萬一不慮體の儀有之早速見出不申時刻相移候ては御届等及遅々甚不相濟事付此度改而晝夜廻番等之次第左之通被仰付候間手堅相守以來怠轉無之様可相心得候事
一晝夜共に時廻り可仕候事

但番人之儀は辻番所詰居時々二人宛打廻り仕何そあやしき儀も有之節は勿論無左候ても見合次第右之外にも相廻り無緩氣を付可申候事

一捨物倒物等或は破損所其外相替儀も有之節は早速物筋え可相届候事
一掃除等無懈怠塵芥捨不申且惡黨者集り不申様氣を可付候事

一右之外勤方之儀は都合辻番請場同様可相心得候事
右之通晝夜廻番被仰付候間只今迄之心得も有之儀候へ共猶又無緩様手堅可被申付候以上

酉六月

同日望火櫓濫登禁止ニ關シ訓示左ノ如シ

火之見へ御用之外上り候事不相成御法候處近來狼相聞候依之向後は別紙付立之外之者上り候儀堅被差留候條若相背者有之候は、其者は勿論番人屹と可被相答候尤別紙之外たり共御用之由番人え達候は、名前承届上げ可申候左候而右名前矢倉方え番人共より付出可申候事

西六月

廿八日益田喜二郎ニ加判役ヲ命ス

同日實相院付久芳五郎右衛門熊野源右衛門へ老臣訓令左ノ如シ實相院宗廣公側室月無瀬重就公養女

覺

- 一實相院様え各事被付置候條萬端無緩被致心遣尤御付之面々行規作法能遂其節候やうに可被申聞候事
- 一御仕渡銀六十貫目を以御不自由も無之御内外相調候様に申合可有心遣候事
- 一御時節柄役人數多被付置候様に不被相成候條上役下役之沙汰に及はず諸事兼

而御間合候様に可有心遣候尤隨分御儉約相立無益之御造佐入無之様に女中役人中え可被申聞候事

一諸請拂之儀時々各被致見分印形詰に可被申聞候事

一男女之差別狼に無之様に常々可被申聞候鎖前より外暮六時より已後女中出候儀停止候各之外被付置候役人中之儀も夜中鎖前より内參候儀無用候若無據子細於有之は各承届可有差圖候事

附鎖前之儀各兩人間之封たるへく候尤時々見届候而封仕せ切候節も可被致見分候事

一火用心之事日夜不可有緩候夜中火之元見分之儀は女中無油斷見廻候様に可有差圖候事

一女中衣類之儀は近年兩御殿え對し被仰出候通無相違可被相心得候事
右之趣被存其旨被付置候面々下々に至迄堅可被申渡候若不心得もの於有之は可被申出候以上

梨 頼 母

月 日

毛 内 匠

久芳五郎右衛門殿
熊野源右衛門殿

晦日宗對馬守義蕃ニ命シ若君誕生ニ付朝鮮之聘使ヲ遣スコトヲ止ム此後永例トナ
ル徳川十五代史

七月六日小船頭磯部七之進逃亡ニヨリ家祿沒收

八日惟保君分婉定君生ル

十六日瀧彌八ニ側儒ヲ命ス

十八日京都留守居遊佐四郎左衛門ニ惟保君裏老ヲ命ス

十九日鷹捉ノ雲雀三十ヲ賜フ

二十二日御用旅行ノ聿朱印人馬ノ外無賃人馬ヲ役使スルコトヲ禁ス徳川十五代史

八月朔日賊子萩ヲ發シ九月十五日江戸着

今春以來萩河添ノ地内諸臣ノ邸宅五六所ヲ官ニ買取シ藥園一區ヲ建設セラレ又別

莊抱舎數字ヲ捌メ以テ休憩ノ處トナシ號シテ南苑ト謂フ又深野町毛利秀之助屋後
ノ隙地ヲ拓キ馬埒ヲ設ケラル

明和二年ヨリ安永五六年ノ間ニ造ル所其資金ハ撫育局ヨリ百貫目ヲ下付シ之ヲ
運轉シタルヲ重要ノ部分トス即南苑ニ藥苑ヲ開キシモ亦此時ナリ

八日大坂諸家賣米券ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

大坂表諸家藏屋敷拂米買請切手所持之もの並銀子入替質物等に取置候町人共公
事出入諸掛合吟味中又は御仕置等被仰付關所に相成候節藏出に差支或は切手不
通用にも可相成哉と疑敷存又は損銀にも可相成哉と見越候而米切手撰きらい
たし切手にて米圍不置ものも可有之候付以來諸家藏屋敷拂米買請切手所持之
の並銀子入替質物に取置候ものともに公事出入奉行所吟味中にて無障切手の
分通用可致候若又拂米買請切手所持之者並質取主等常人え計拘妻子え不拘御仕
置被仰付關所等に相成候節も切手之分は妻子に可被下置候尤吟味中家財改封付
候共米切手の分は封外に候間是又通用可致候且出切手の分月にも相滞候は、

去巳年被仰出候通之空米切手準候間藏元は勿論藏役人迄も御咎可被仰付候條此旨可存者也

右之趣可被相觸候

八月

十六日引田成一代兩度許可ニ關シ伺指令左ノ如シ

劄紙 伺之通明和二年以後改而一代兩度被差免候事

明和二年引田成御書付之内惣而引田成之儀は誠不得止願出被遂御許容候上は内外目立候程之儉約可有之儀候處只今迄も規則不被相立候放下之意得上之御沙汰筋も容易之様相成候段甚不宜との御思召を以此度仕法被相定候且向後引田成一代兩度迄は可被差免と有之候

此段明和二年迄引田成之分は一度成或は二度成にても捨り被仰付同年より以後改而一代兩度可被差免哉

劄紙ニ 別紙ニ

寶曆五年寅年ヨリ同八年寅年迄

當代引田無之

尖戸河内

劄紙ニ

寶曆四年戌年ヨリ同九年卯年迄

當代引田無之

毛利秀之助

寶曆六年子年迄

毛利伊豆

寶曆四年戌年迄

毛利伊勢

寶曆五年亥年迄

毛利織部

追願同十二年午年ヨリ戊年迄五箇年

劄紙ニ

寶曆六年ヨリ同十年迄引田

當代引田無之

益田越中

寶曆七年丑年迄

福原近江

寶曆九年卯年迄

清水長左衛門

寶曆四年戌年迄

穴道備前

追願同十年辰年ヨリ午年迄三箇年

寶曆六年子年迄

益田隼人

新編 武藏野史 卷之七十七

引田無之 梨 羽 賴 母

同寶曆八寅年ヨリ 國 司 主 稅

同寶曆八辰年ヨリ 井原孫左衛門

以上

廿四日ヨリ廿五日ニ至ル興元公二百五十回忌秀嶽院ニ於テ法會修セラル興元公ハ

子元就公
兄ナリ

九月四日貨幣之制五匁銀發令左ノ如シ大目付同狀

此度文字銀同位を以て掛け目五匁に定り候銀吹立被仰付候間有來丁銀小玉銀に
取交渡方請取方無滯可致通用候

右之越國々えも可觸知者也

九月

右之通可被相觸候

七日高洲市之進發狂ノ實子八十八郎逃走ニヨリ家祿ノ内五石減少殘高百七十八石

給與

廿一日關老松平右近將監松平周防守及若老中其他幕吏數人ヲ招テ享應セラル二十

三日又列侯數人及支封ヲ招キ享待將軍家世子ノ誕生ヲ賀セルナリ

廿二日奧番頭格井原孫右衛門ニ番頭役ヲ命ス

廿八日三浦内左衛門關老招請用務苦勞ニヨリ銀十枚下付

十月二十三日鷹捉ノ雁ニヲ賜フ

廿四日春日大宮司波多野宮内先年故アリ家名斷絶後社家都合役伊豫八幡神主河野

肥前守宮崎八幡大宮司吉屋若狹守兩人へ暫役命セラレシニ是日春日大宮司中麻原

備前守ニ兩國社家頭取役ヲ命セラル

十一月二日毛利能登守匡滿溝口直温女へ納采

十八日成婚十二月十五日登營拜謝

十日昨年十二月二十三日提出公木會路旅行伺書ニ對シ先來年ハ無用タルヘキ指令

アリ

十一日政次郎君初ヲ袴ヲ着ス年五歳

十二月朔日將軍世子家千代名ヲ家基ト改ム

二日公列侯ト皆登營世子家基ト撰名セラル、ヲ賀スルナリ

廿三日長崎港浚利之費ヲ入港船舶ニ課ス令文略大目付同狀

廿六日氷上山眞光院惠寂隱居願ヲ許シ觀行房ニ後任ヲ命ス一山中年來墮落ノ聞アリ訓戒左ノ如シ

眞光院並一山中

右御國中にては廉有寺格被仰付置坊中も數多令付屬寺中之作法肝要之儀年々被仰聞候御條目之旨も有之候處近來一山之心得墮弱に相聞先は任職之不沙汰に相當於寺中は役者並坊中の住持等御寺守護之氣遣疎相見我儘緩怠におよふ歎累年不埒出來自然勝手方も難澁之爲體彼は一山之不届法式も衰に可及儀右に付ては被仰付方も候へ共先其分に被差置候條以來急度可相嗜候此上不埒於有之は一廉被相答品によつて一山可被及改革候事

廿九日吉田裁判手子彦右衛門寶曆九年分山口三田尻熊毛三裁判ヨリ送切手二百八十三石三斗四合七勺七才窃取逃走セリ贖職ノ科ニヨリ前代官氏家矢之助家祿百三十三石四斗之内十石減少當代官村上吉兵衛家祿百四十石之内十一石減少前下代檜崎源右衛門當下代佐村喜左衛門給米減少
相府年表

月日不詳本年玉江中渡始ル中渡賃錢船二艘當年ヨリ往十五箇年被差免

明和三年丙戌正月公江戸邸ニ在リ

五日夜萩地大風雨狂瀾高數尺朝鮮漁船一隻人十須佐浦へ漂流長崎ニ護送例ノ如シ

九日吉川吉五郎參府江戸ニ於テ名ヲ監物ト改ム五月二日歸邑

廿三日世子徳元君始テ甲冑ヲ着ス

廿八日此日長柄傘ヲ持タスルハ立傘ニ紛ル、ヲ以テ之ヲ禁ス徳川十五代史

廿九日公登營昨日將軍世子之着袴ヲ賀ス

新編 日本書紀 卷之七十七 英雲公紀

二月五日松平肥後守ヨリ我誠子へ納采小袖三重帶三筋熨斗鉋鹽網鯉昆布錫各一折
又肥後守父子ヨリ公及夫人世子友子勢代子澄子政二郎諸君實相院夫人顯光公へ各
贈物アリ又家老及諸吏ヲ使者トシ肥後守父子其他ニ贈物答謝セシメラル
六日赤川仁右衛門肥後守所役ヲ免シ手回頭格トナス
七日公ヲ大城へ召サレ閣老列座濃州勢州ノ諸川修築ノ役ヲ命セラル今同助役我大藩
夫兩家ナリ於是惣奉行益田喜三郎以下七十餘人濃州笠松ニ出役又吉川氏ヨリ助役如例

御家譜引書所載

增御手傳之事

石原清左衛門御代官所
美濃國本巢郡御料

牛牧村外十一箇村組合

一逆水留門樋

一箇所

右園堤共

右之通此度增御手傳

別紙 石原清左衛門御代官所

美濃國本巢村

一用水以樋

一箇所

右書略ス

九日毛利專之助伯母於猪野德山ニ於テ死去江戸三郎三十間堀邸鳴物高聲二日間停
止

十三日大檢使福原與三左衛門用所役ヲ命シ留守手元役ヲ兼シム

十四日毛利伊勢ニ加判役ヲ命ス

十五日毛利專之助就馴初テ登營家治將軍ニ謁ス

廿六日山縣半兵衛ニ直目付ヲ命ス

廿八日唐船漂着有之處置ニ關シ發令左ノ如シ

從前々唐船漂着有之節は其所之御料私領より長崎表に挽送り右漂着唐船長崎え
挽送り候迄之間唐人糶米鹽噌薪其外諸入用挽船賃等從長崎相渡來候由に候得共

破船難船にて荷物海失或は溺死等有之節は重き災難之事付於長崎表も爲手當定
外商賣等も申付候事付船損し荷物海失有之程之難船破船等は取揚荷物に懸り候
入用之分計長崎奉行所より請取之其餘之諸入目は其浦々所役に可致候勿論右入
用請取方相減候とて危略之取扱無之様可被申付候尤一通り之漂着船は是迄之通
諸入用長崎奉行所にて吟味之上相當に相渡にて可有之候
右之趣九州筋國々御料は御代官私領は領主地頭より可申渡候

二月

右之通可被相觸候

三月七日燈油私賣ヲ禁ス令文略 德川十五代史

十一日火災ノトキ奥向ノ輩火元見トシテ出馬ノ者ハ端反裏金ノ網代笠馬上提灯ニ

白赤青堅筋ツケ目印トセラル 德川十五代史

廿日江戸櫻田邸大到來藏焼失公差控ヲ申告セラレシニ差控ニ及ハストノ指令アリ
大到來方藤田源兵衛長安權左衛門ニ逼塞ヲ命ス

廿三日毛利專之助五節月次登城請願許可アリ

廿九日コノ頃御藏門徒ト唱へ邪説ヲ以テ衆ヲ惑ス者アリ悉ク捕縛入牢セシム 德川
實紀

四月朔日新堀夫人松平山城守室女子死去公之孫女ニヨリ一日遠慮

三日毛利專之助前髪ヲ執ル

七日世子家基加冠大納言ニ任ス公列候ト皆衣冠登營拜賀

九日世子慶事ヲ祝シ大城ニ於テ能舞アリ公登營觀覽槍折ヲ獻セラル

同日世子徳元君後房ヨリ別邸移居ニツキ訓示左ノ如シ

覺

一此度若殿様別御住居被爲成候得共いまた御格式も不被相立別而御手狭之儀其
上御相應に御人被付置候様にも不被相成事候條諸事只今迄御裏被成御座候御
居形之通被相心得上役下役を不謂無親疎申合御間合候様可被遂其節候事
附假初も權威かましき儀無之互に相慎雜話等可爲無用候別而於夜着部屋狼

之儀無之様可被相嗜候事

附御時節柄之儀候條諸事御費無之様可有心遣候事

一いまた御格式等不被相立内之儀候へ共御前向萬事之御取捌肝要之儀御幼年之内は猶以御平生廉直正路之儀而已被開召馴候様相心得假初も邪なる儀無之御稽古事等御進被遊候様常々可有氣遣候事

一火用心之儀別而大切之事候條面々可有其氣遣候事

右之通被仰出候條御部屋付之面々宜被相守候事

戊四月

梨 頼 母

十二日松平山城守信將室好子卒ヌ年二十三法證清峰院公ニハ娘ノ忌十日世子ニハ姉ノ忌二十日受ケラル江戶三郎三十間堀邸共鳴物停止三日

十五日江戶留守居益田隼人ニ黒印令條ヲ授ク

十八日公第十三子定次郎君生ル母於留楚

廿三日毛利專之助初テ暇ヲ賜フ四月朔日初謁見

廿五日去二十二日公喪期終ル是日大納言元服官位ヲ祝シ太刀一腰馬代黄金十兩ヲ獻セラル

同日江戶邸近火之トキ火除備付等警戒ニ關シ六通ノ訓示アリ其文略

同日石井永立吾藩出入ノ御城坊主ナリ其身一代扶持方五人分交付

廿七日公歸國暇ヲ賜フ

五月朔日京都銀子方吉山左源太逃亡ニヨリ給與米沒收

六日長府家臣繪師長澤榮列採用高二十五石給與定府命セララルニヨリ扶持方五人銀

一貫目下付

七日毛利專之助江戶ヲ發シ六月二日歸邑

九日公江戶發駕中國路陸行

廿三日毛利專之助關三十郎妹ト結婚乞願許可アリ

廿九日陣僧田中閑清公歸國先發ニテ備後田島沖航行中誤テ海中へ陥落溺死セリ

六月朔日銅座之制發令アリ其文略徳川實紀

九日公歸城

十五日將軍吉川監物へ初テ内書ヲ賜フ

十八日濃州勢州修築諸川竣功申告書ヲ呈セラル光公代寬保二年利根川助ノ役ヨリ

ヲ命セラル惣費用ヨリ補助セリ

廿一日當職毛利内匠辭職ヲ許シ加判ヲ命ス加判毛利織部ニ當職ヲ命ス

晦日粟屋六郎右衛門藏元兩人役ヲ免シ札座頭人所帶方兼務ヲ命ス所帶方佐藤與三

右衛門ニ藏元兩人役ヲ命ス下村權右衛門ニ寄組以上所帶差引方ヲ命ス柏村四郎右

衛門ニ遠近方暫役ヲ命ス

同日誠姫取次役安間三右衛門發狂自殺ニヨリ給與米減少嫡子右内へ家督ヲ命ス

七月朔日濃勢兩州修築竣功ニヨリ此日公ノ名代毛利能登守ヲ大城ニ召シ時服三十

ヲ賜フ又吉川監物ニ時服六其他賜物左ノ如シ

時服六銀五十枚

益田喜二郎

時服四銀三十枚

兒玉三郎右衛門

時服四銀二十枚宛

山縣半兵衛

郡野彌右衛門

山名字右衛門

吉田半兵衛

羽仁五郎左衛門

山田九郎太

松原十郎右衛門

井上族

木梨勘左衛門

諫早七郎右衛門

乃美五郎吉

時服三銀十枚宛

同日冷泉侍從三位室農姬死去公姪ノ續ナルモ本家家督ニヨリ忌服ナシ

十二日本年諸臣祿高百石十石懸ヲ給與セラル連年巨額ノ費用皆世ノ所知也來歲亥

ヨリ丑ニ至ル三年間ハ復半額申知ヲ給セラルヘシ財政困苦ノ際諸臣皆儉素質朴ヲ必要トスヘシトノ公布左ノ如シ

御意之旨覺

所帶方難澁に付ては無據累年家來中出米等之吟味を以漸く當分之凌申付候折柄不存寄今般御手傳蒙仰此入用倍先年莫太之儀國役といへとも年來之不勝手故手段無之處江戸大坂用達中其外町地方令出精當座之儀は旦々相調候然共右於價は家中出米等之外別段之手當無之下より申出之筋も聞届候へ共此内馳走打續差問之程難賦止先當年は少々宥免之沙汰申付來亥年より往三箇年之間又々重き出米可申付候條下にては此旨相辨盡儉約於遂奉公は可爲祝着候尙委細當役中より可申聞候事

來亥より丑迄三箇年半知掛る黃紙切手質借相印替へ諸内借屋敷質現質借四廉寛延四年未の仕法去辰年被仰出分以來捨りに相成る草會年表

廿日周布與三右衛門ニ記録所役ヲ命ス

八月五日臺所頭役粟屋彌五左衛門數十年勤勞ニヨリ金十兩下付

十一日加判益田喜次郎江戸ニ於テ乘輿ノ乞願允可アリ誓詞ニ及ハス目付へ斷狀出スヘシトナリ

十二日諸國寺社修理助力勸進之制發令左ノ如シ大目付同狀

諸國寺社修復爲助成相對勸化巡行之節自今は寺社奉行一判之印狀持參御料私領寺社領在町可致巡行候公儀御免之勸化には無之相對次第之事に候間御免勸化と不紛様可致旨御料は御代官私領は領主地頭より兼而可申聞置候

戊八月

右之通可被相觸候

十三日井上族ニ目付役ヲ命ス

十四日山内九郎兵衛城代役ヲ免シ組頭役兒玉淡路ニ後任ヲ堅田内記ニ組頭役ヲ命ス

九月四日五日大納言誕生ヲ祝シ朝鮮ヨリ對州へ派出ノ譯使乘船漂流ニ關シ大目付

享和十一年十一月

回狀アリ其文略

十五日和智帶刀寺社奉行役ヲ免シ宍戸大學ニ後任ヲ命ス

十八日城代兒玉淡路城内へ入り留宿ノトキ櫓へ持鎧持入願認可アリ

廿一日誠子松平肥後守邸へ入興婚姻式成ル二十八日肥後守我邸ニ來ル祝餅一折五數

十百八其他贈物アリ誠子ヨリ出頭番頭諸吏員ニ各眞綿三把ヲ贈ラル

廿八日薩摩小路上水組合費吾藩祿高ニ對スル賦金三十三兩三步ト十四匁五分五厘

納付

九月此月龍福寺建立 草會年表

十月十六日天主教徒査檢之制發令左ノ如シ

古切支丹轉切支丹類族有之面々生死其外異變等年々七月十二日無懈怠相改候儀

は勿論之事に候得共近來屆後れも有之旨相聞候左様には有之間敷儀候向後二季

之改異變無之候共有無宗門改え可相屆候且又毎年十月に至差出候宗門改證文も

無遲滯宗門改え差出可申候

右之趣向々え可被相觸候

戊十月

同日公及澄子君於利尾ト同ク曩ニ山口温泉ニ浴セラレ又十四日宮市ニ至リ天滿宮
祭式臨覽アラントス十五日雨アリ祭式今日ニ及ヘリ兄部某宅ヲ以テ公ノ觀覽所ト
ス

十一月十六日定次郎君ヲ君夫人養トナス

廿日遠近方山田九郎太ニ京都留守居ヲ命シ高洲三郎兵衛ト交代セシム柏村四郎右

衛門ニ遠近方本役ヲ命ス

廿一日工商受領之制發令左ノ如シ大目付同狀

諸職人受領蒙勅許候者共繼目之受領不相願父或祖父蒙勅許候受領を其子孫名乘
候者共も有之趣に相聞候若右體之者共有之候は、向後國名並官名共自分と相名
乘候儀は可爲無用候尤繼目之受領相願候儀は勝手次第たるへく候
右之通御料は御代官私領は領主地頭より可相觸者也

十一月

右之趣可被相觸候

廿八日三上伊織放逐セラレシ小人十郎左衛門家人ニ雇入レタルハ違法ニツキ家祿高百五十石ノ内十分一ヲ減シ殘高百三十五石給與

十一月日不詳本年ヨリ往七年間儉省ノ法ヲ建歳首歳晩ノ諸式省略及常例上ヨリ所賜下ヨリ獻スル處悉簡便減約ニ從ント條令二十件ヲ公布セララル

十二月三日穴生中村九郎兵衛儒學ニ志シ明倫館入學入寮生徒ノ誘掖ニ努メタルヲ以テ其身一代儒者兼業ヲ命ス

十五日公濃勢諸川修築出役ノ諸員ヲ召シ毛利内匠梨羽頼母へ各縮緬五卷益田喜二郎エ刀一口ヲ賜フ其他賜物差アリ

廿六日井上靜馬ニ奥番頭ヲ命ス

明和四年丁亥正月公萩城ニ在リ

十一日去年春濃勢助役ノ勞ヲ以テ今春東觀三月間ノ延期ヲ許サレ四月五月在國ニヨリ月並獻上ノ伺書左ノ如シ

私儀例年四月在國不仕御暇年は五月之儀も下旬歸着仕候付爲窺御機嫌獻上物ハ不仕候然處去年川々御普請御手傳就被仰付候當年參府延引被仰付四月五月在國仕候間兩御丸え以飛札相伺御機嫌四月國元之干鯨子一捲宛五月之儀は海月一捲宛獻上仕度奉存候依之奉伺候以上

正月十一日

御

名

附札 可爲伺之通候

廿五日三田尻田嶋ノ新拓地去年十月十七日重修鉦初今日潮止成功當職那奉行皆來會ス

相府年表所載三月三田尻田島御開作築立相成大濱と唱被仰付

二月二日ヨリ四日ニ至ル觀光公十七回忌大照院ニ於テ法會修セララル

三月五日林傳右衛門老衰辭職ヲ許シ數年ノ功勞ニヨリ大組ニ加フ林久右衛門大濱

開作創設ノ爲メ巨額之馳走米ヲ提出シ高十五石五斗五升一合之内半額下地ヲ以テ持掛給米ニ併セ三十人通ヨリ無給通ニ加フ大濱開作創設米馳走ヲ遂ルニヨリ山根新左衛門外三十人昇格加祿米銀給與差アリ

同日大船頭格河野彌兵衛朝鮮信使來聘ノトキ彌兵衛計畫ヲ以テ諸費減省銀八十貫目餘裕ヲ生シタル拔群ノ功勞ニヨリ家業ヲ免シ無給通ニ加フ

同日檜崎五郎兵衛ニ矢倉方ヲ命ス

廿四日綿實賣買之制發令アリ其文略大目付同狀

同日郡奉行羽仁五郎左衛門近年多端ノ用務苦勞ニヨリ野相召羽織一下付

廿六日公玉江別館ニ於テ弓銃手ノ試術ヲ臨覽セララル

五月九日公弘法寺ニ至リ騎射調習臨覽

御國政再興記數十年世上一統の困窮且馳走出米打續き彼此家子衣食に乏敷自然と諸士中自馬定法の數相減し子弟の馬藝稽古不如意に成一方武備の闕典につき弘法寺界内貸馬稽古之法被仰付云々

十二日潰銀私賣ヲ禁ス令文略 雜川實紀

十五日大濱開作及修補銀創設米ノ馳走ヲ遂ケ其他勲勞ニヨリ河村養現外七人加祿昇格米銀ヲ賜フ差アリ

同日目付役井上族世子付與番頭格トナス大組物頭栗屋喜兵衛ニ目付役ヲ命ス

十九日松平之稱號ニ關シ大目付同狀左ノ如シ

松平の御稱號名乘候者惣領之外にても後々御目見以上に可致心當之者は只今迄之通相心得御目見以下に可致存寄之ものは御稱號爲名乘候儀可爲無用候尤御目見以上に可致心當にて御稱號爲名乘置候者御目見以下に相成候儀有之候は其節相改御稱號爲名乘申間敷候

但當時御目見以下並陪臣浪人にても筋目有之御稱號名乘來候者は可爲只今迄之通候

右之趣向々え可被相達候

五月

廿五日鑛山鑿堀之制發令左ノ如シ大目付同狀

諸國御料所並私領寺社領入會之場所金銀銅鐵鉛山見立願人有之候は、御代官地頭添狀を以向後鑛山奉行川崎平右衛門方え願出吟味可請候勿論是迄有來之金銀銅鐵鉛山之儀も一統平右衛門方にて吟味有之筈に候平右衛門儀所々かな山御用に付相廻り候間京大坂其外最寄之所にて願出候儀は是亦勝手次第之事
右之趣御料は御代官私領は領主地頭より可申渡候

五月

五月日不詳上山庄左衛門屋敷ヲ公收シ濱屋敷ト唱ヘシム相府年表

六月五日宮木惣右衛門檢斷頭河野十左衛門申請之趣アリ無給通ニ加へ檢斷頭ヲ命シ業務怠ナカラシム

二十日德見文平父長門屋傳助數十年長崎ニ於テ屋敷ヲ提出シ用務ヲ辨シ又今回三田尻開作費途へ銀百貫目馳走ヲ遂ケ年々米八十石交付アリシヲ知行高二百石トシ文平へ給與家臣ニ採用將來大組格ニ命スヘシトナリ

廿八日大目付同狀左ノ如シ

關東筋川々御普請被仰付候付領知之内御普請有之候面々爲御禮老中支配之分は老中え可相越候若年寄支配之分は左近將監若年寄中え可相越候病氣幼少之分は名代在邑は飛札可差越候
右之通可被相送候

六月

廿九日諸番士夏期用襦ヲ許ス發令アリ其文略 德川實紀

七月十日周布與三右衛門惟保君裏老ヲ命ス

十一日公儀人有福正右衛門配録所役ヲ命ス

十七日長谷川太右衛門ニ大檢使役ヲ命ス

廿五日毛利能登守出萩八月七日歸邑

八月七日澄子理就公第十子松平下總守忠啓ニ嫁ス可キノ旨願ノ如ク許命アリ

十日大濱開作創設米馳走ヲ遂ケ田村與一右衛門外四人加藤昇格差アリ

廿五日鑛山鑿堀之制發令左ノ如シ大目付回狀

諸國御料所並私領寺社領入會之場所金銀銅鐵鉛山見立願人有之候は、御代官地頭添狀を以向後銀山奉行川崎平右衛門方え願出吟味可請候勿論是迄有來之金銀銅鐵鉛山之儀も一統平右衛門方にて吟味有之筈に候平右衛門儀所々かな山御用に付相廻り候間京大坂其外最寄之所にて願出候儀は是亦勝手次第之事
右之趣御料は御代官私領は領主地頭より可申渡候

五月

五月日不詳上山庄左衛門屋敷ヲ公收シ濱屋敷ト唱ヘシム相府年表

六月五日宮木惣右衛門檢斷頭河野十左衛門申請之趣アリ無給通ニ加ヘ檢斷頭ヲ命シ業務怠ナカラシム

二十日德見文平父長門屋傳助數十年長崎ニ於テ屋敷ヲ提出シ用務ヲ辨シ又今回三田尻開作費途へ銀百貫目馳走ヲ遂ケ年々米八十石交付アリシヲ知行高二百石トシ文平へ給與家臣ニ採用將來大組格ニ命スヘシトナリ

廿八日大目付回狀左ノ如シ

關東筋川々御普請被仰付候付領知之内御普請有之候面々爲御禮老中支配之分は老中え可相越候若年寄支配之分は左近將監若年寄中え可相越候病氣幼少之分は名代在邑は飛札可差越候

右之通可被相達候

六月

廿九日諸番士夏期用襪ヲ許ス發令アリ其文略 鎌川實紀

七月十日周布與三右衛門惟保君裏老ヲ命ス

十一日公儀人有福正右衛門記錄所役ヲ命ス

十七日長谷川太右衛門ニ大檢使役ヲ命ス

廿五日毛利能登守出萩八月七日歸邑

八月七日澄子重就公松平下總守忠啓ニ嫁ス可キノ旨願ノ如ク許命アリ

十日大濱開作創設米馳走ヲ遂ケ田村與一右衛門外四人加祿昇格差アリ

廿三日當職毛利織部ニ黒印令條ヲ授ク例文略

九月朔日公第十四子多鶴子萩ニ生ル母侍女千佐

三日桂九兵衛與阿武郡滑山用杉年々減少自費ヲ以テ杉苗一萬本栽培繁殖セシハ奇
特ニヨリ銀三枚下付

九日公東觀發怒十日大濱ノ新拓地巡覽中國路陸行京都ニ抵ル

公春夏ノ際參覲ノ期ニ當レリ而シテ去年濃勢助役ノ勞ヲ以テ更ニ三月間ノ休暇
ヲ許サル七月ニ至リ病癒ザルヲ以テマタ乞テ延滞今日ニ至レリ

閏九月六日唐和明鑿賣買ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

唐和明鑿賣買之儀江戸京大坂堺四箇所於會所可令賣買旨寶曆八寅年同十辰年右
四箇所町中相觸候處今以諸國出明鑿於國々致賣買會所え不差出趣相聞候自今以
後諸國出明鑿之分右四箇所之内最寄之會所え差出賣買可申候四箇所會所之外に
て諸國出明鑿之分賣買商人共貯置候明鑿於有之は右會所え可賣渡候若心得違於
有之は咎可申付者也

右之通御料は御代官私領は領主地頭より可觸知者也

閏九月

十一日農民強訴徒黨逃散之渠魁治尉之制發令左ノ如シ大目付回狀

國々百姓強訴徒黨又は逃散候儀は堅停止に候上猶又寛延三午年右體之儀於有之
急度途吟味頭取並差續事を得候者夫々急度曲事可被申付旨相達候處西國筋百姓
共之儀は我意に強今以御代官並御預り所役人領主地頭より之申付を拒間々逃散
いたし他領へ願出候儀も有之由不届至極に候然處領主地頭に寄心得違仕置等に
も不申付候は歸村可爲致由難澁候儀粗有之趣相聞不埒成事に候以來右體之儀有
之におゐては其所より早速致歸村候様取計暫も其所に差置候儀有之間敷候尤其
元々え歸村之上先達而相達候通途吟味急度曲事に可被申付候
右之通西國筋領分知行有之面々え可被相觸候

閏九月

同日公着府

十月朔日公登營謁見獻物如例

六日鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ

十五日風俗令發布左ノ如シ大目付同狀

百姓共大勢子共有之候得は出生之子を産所にて直に殺候國柄も有之段相聞不仁至り候以來右體之儀無之様村役人は勿論百姓共も相互に心を付可申候常陸下總邊にては別而右之取沙汰有之由候若外より相願におゐては可爲曲事者也

十月

廿七日毛利謙岐守政苗雉子橋外ノ屋敷公收淺草鳥越ニ於テ戸田淡路守屋敷ヲ賜フ

此月淺草米藏出納ノ制度ヲ令ス其文略繪川十五代史

十一月七日大坂用達上田忠左衛門死去ニヨリ嫡子上田八郎左衛門へ香奠銀三枚下

付十二月二十四日八郎左衛門へ合力米五百俵下付舊ノ如シ

十四日手元役井上與左衛門ニ矢倉方兼務ヲ命ス

十九日松平土佐守死去土佐へ使者ヲ遣シ香奠銀五枚供セシム松平土佐守室ハ重就公第四子ナリ

廿九日物頭小幡源兵衛ニ公儀人ヲ命ス

十二月十一日は日邸内煤掃公當役舍中ニ避ラルヲ例トス儉省年間之ヲ罷ラル

十二日辻番所之制ニ關シ藤堂和泉守松平出雲守ヨリ同狀左ノ如シ

都而辻番所之儀近年夜中戸を建置廻り場見廻り等不行届不埒之所も有之由に相聞え候前々被仰出候御定之通夜中番所前之戸明置廻り場繁々見廻り怪敷者於有之は留置御目付方え可申出候近來怪敷者罷通り候ても見通に致し其上辻番所え人集等致し候場所も有之由左候得は番人共に子細有之様に相聞如何に候右體之儀有之間敷候處尙又今度急度右之趣番人共え被申渡以來不埒之筋相聞候上は嚴敷御咎も可有之事に候間此旨番人共え可被申渡候尤組相辻番之儀は右之趣頭取之面々相心得番人共遠吟味差置候様可被致候
右之趣攝津守殿被仰渡候間申達候尤承知之趣自分共兩人之内え可被申聞候且又御同席中えも通達可有之候以上

松平縫殿頭

松平庄九郎

藤堂和泉守殿

松平出雲守殿

右留守居

同日大目付回狀左ノ如シ

大廣間御禮申上候面々持參御太刀置所疊目

年始

中將御下三段下ヨリニテ御禮目

少將御下二段下ヨリニテ御禮目

侍從御下一段下ヨリニテ御禮目

四品御下二段板御敷ニテ御禮目

八朔日

中將少將侍從之無差別御下段より二疊目に置之一疊目にて御禮

四品御下二段板御敷ニテ御禮目

右之通大廣間にて御禮申上候面々爲心得寄々可被相達置候

十二月

十六日諸吏員出伺ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

八組頭 寄組 記録所役 奥番頭 奥番頭格 御直目付 諸御裏年寄

公儀人 御七醫

右出府之節は爲御案内出伺被仰付候事

御鍼醫 外科

右前々爲御案内出伺被仰付來候得共向後被差留候尤御用有之被召出候儀は各別之事

上々様御付之御醫師

右同斷

御目付役

右折々出伺被仰付候事

矢倉頭人 御用所其外手子中

右出伺被仰付來候得共向後被差留候尤御用有之被召出候分は各別之事

御番醫

右同斷

、御由緒之子共

右前方親在勤之御由緒を以出伺被差免來候へ共向後不及沙汰候事

右之通被仰付候條向後無間違様被相心得交替之節可被申傳候以上

明和四十二月

同日毛利專之助就馴從五位下ニ叙シ大和守ニ任ヌ

廿日兒玉市之助ニ和田倉夫人裏老ヲ命シ來春會禰權右衛門ト交代セシム

廿一日貨幣之制發例左ノ如シ大目付同狀

文字銀同位を以て掛目五匁に定り候銀吹立被仰付候間有來丁銀小玉銀に取交可致通用旨去々酉年相觸候得共以來右五匁銀之儀は相場に不拘金一兩に六十目替之積を以金一步に銀三枚金一兩銀十二枚之積渡方受取方無滯可致通用候右之通國々えも可觸知者也

十二月

廿三日三河臺預地之内雜司ヶ谷百姓平次郎拜借菜園場へ交付ニツキ幕府へ申報左ノ如シ

赤坂三河臺私へ御預明地之内請取可申段長田越中守より申來昨日家來之者右場所差遣候處越中守家來竹本越前守家來立會請取之殘而馬場一箇所の場三箇所繪圖面を以引渡候付請取せ申候此段御届仕候以上

十二月廿三日

御

名

廿七日旅人病氣之處置發令左ノ如シ大目付同狀

東海道中仙道甲州道中日光道中奥州道中右宿々旅籠屋は勿論脇往還其外之村

々にて宿を取候旅人煩候は、其所之役人立會醫師を掛療養を加置其旨御料は御代官私領は地頭え相届五海道は奉行へ宿送りを以遂注進右旅人早速快無之趣に候は、其者之在所之村役人等え申遣親類呼寄對談之上可任存寄に若療養も不加宿繼村繼杯にて送出候儀願におゐては五海道は旅籠屋間屋年寄其餘之村役人共に急度御仕置可申付候

一右之外通掛り相煩候旅人も其所之役人立相醫師を掛療養を加勿論懷中に往來手形有之候哉相糺御料は御代官私領は領主地頭え致注進右病人早速快無之趣にて在所え歸度候得共路用貯無之候間送届吳候様申候は、書付取之其最寄に支配之役所有之候は、訴之差剛を請亦は支配之役所無之場所は其旨致注進置所役人共得と遂相談右病人頼之趣を認相添次村え駕籠にて送り夫より次之村々にては病人之様子次第服藥爲致同様取計在所え可返遣候

但旅人申立候在所え送り届萬一其所之者に無之候は、不取送様其所に留置其筋え可訴出候

一途中にて相果候は、次村え不繼送支配之役所被致注進其所にて假埋にいたし置其者之在所親類村役人え掛相候上其所に葬候共望に任すべく候若道心者廻國之類杯懷中に何國にて相果候は、其所え葬候様本寺觸頭其在所之寺院或は親類等慥成書付有之候は、支配之役所え訴之在所え相届に不及其所え可取置勿論最初より行倒相果罷在候節之取計も同様之事

右之通可相心得萬一療養も不加或は内々にて繼送におゐては且又急度御仕置可申付候

一都而右類之諸入用は享保二十卯年五海道え相觸候様病人又は在所より差出候は、格別無左候は、宿割村割にいたすへし

右之趣可相守者也

亥十二月

右之通可被相觸候

是歲春來屢風雨洪水アリ國內田圃損害高五萬三千七百三十二石餘民家ノ倒塌スル

モノ二百二十戸幕府へ申報ス

毛利十一代史卷之七十八

大田報助編次

英雲公記九

明和五年戊子正月公江戸邸ニ在リ

四日火賊逮捕之制發令左ノ如シ大目付同狀

覺

一火を付候者召捕町奉行所え可來事

一火を付者之あり所をしらは早速可訴出事

右之品々有之は御ほうひとして此銀子三十枚下さるへしたとひ同類たりといふとも其科をゆるし此御ほうひ下さるへしあやしき者は不慥に候共召連來るへし若火を付る者を見のかし聞のかしに仕追而相知候は、其科おもかるへき者也

寅十一月

奉

行

右之通此度日本橋え札建候間武士方召仕下々えも此趣申合あやしき者に候は、
召捕差出候様可被相觸候

右之趣享保七年相觸候武士方寺社方召仕下々迄右之趣得と申聞候様猶又可被相

觸候十二月

十七日中島市郎兵衛右筆本役ヲ命ス

廿三日公來年歸國ノトキ木曾路旅行ノ件乞願許可アリ

正月日不詳吉川監物經倫一柳土佐守女ト定婚願許可アリ

二月十五日列子重就公第井伊掃部頭嫡子豊吉ト婚約成ル未練而卒

廿三日江戸方筆者小川嘉右衛門ニ大檢使兼役ヲ命ス

同日毛利能登守邸出火三家年表二月二十三日
今井谷邸出火トアリ

同日御藥園屋敷ヲ南苑御茶屋ト唱シム相府年表

廿七日立坊ニツキ諸大名惣出伺公病アリ登營ナシ

三月朔日重就公第十五子雅子後子改萩ニ生ル母家女房種織

同日世子徳元君月次初ヲ登營三日節句始テ登營

十五日重就公ハ夏期世子ハ夏秋用襦袢認可アリ

十九日世子徳元君元服家治將軍諱字並刀ヲ賜ヒ從四位下ニ叙シ壹岐守ニ任シ治元
ト稱ス

元ノ訓大納言家基ニ障礙アルニヨリ「ナカ」ト訓ス

廿一日世子元服用務苦勞ニヨリ室田忠助上春甫助吉田長古へ各銀三兩下付木梨平
右衛門外三人下付金差アリ

廿三日世子始テ幼服ヲ除ク袖留公夫人諸女君ト同席享宴ヲ開キ謠曲五番ヲ奏セシ
ム

當春渡口橋石ニ成ル玉江臨光院觀心院立深川御茶屋建ツ草舎年表

九日尾濃勢三國堤防修築ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

今般尾州濃州勢州川々御普請之儀去冬見分之者差遣はし候節目論見候外は御普
請追願増願等不相成縱願出候ても不取上筈掛り御勘定奉行え申渡候間其旨相心

得追願増願等不致候様村々え御料は御代官え私領は領主地頭より可被申渡候四
月

右之通可被相觸候

十五日公歸國暇ヲ賜フ

十八日江戸留守居益田隼人ニ黒印令條ヲ授ク

月日不詳水練ニ關シ訓示左ノ如シ

御歩行中之儀萬治御條目之旨有之心得尋常にては不相觸候處いつとなく惰弱
相成たると相見候達者水練等之儀に付ては度々被仰出候筋も有之候得共上覽罷
出候ものは數多も無之増而其餘は彌以如在意に打過候儀と相見御持方不宜候條
向後急度相勵壯年之内兵法早業等都而健之儀心懸令稽古御奉公相勤候覺悟肝要
相心得候様に可被申聞候事

十六日尾濃勢修河ノトキ物價ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

今般尾州濃州勢州川々御普請之儀御手傳被仰付候然處前々御手傳之節竹木石其

外諸色直段無謂高直に致し候儀も有之様相聞候右體之儀は有之間敷事に候依之
此度御普請中竹木石は勿論其外諸色共可成丈下直にいたし御普請不差支様村々
より賣出可申旨御料は御代官私領は領主地頭より早々村々え可被申渡候四月
右之通尾州濃州勢州領分知行有之面々え可被相觸候

廿一日公江戸發駕中山道ヲ經テ京都ニ赴ク

廿八日令ス徳川十五代史

一世上通用之ため銀座におゐて眞餘錢吹方被仰付候右眞餘錢一文にて並錢四文
之代りに相用國々に至迄無差支様可令通用者也

五月廿三日公歸城

六月朔日治元君始テ家基大納言ニ謁ス

十三日夜阿武郡須佐浦失火民家百二十五戸焼亡

廿八日井上左源太ニ目付役ヲ命ス

七月四日泰雲寺役院法明院先住親宗不法アリ退院中逃亡セシニ豊前國宇佐郡代官

榊斐十太夫ヨリ逮捕ノ通牒アリ依テ勘定奉行へ報告セラル

九日増山對馬守重就公室死去細川若狭守妹ナリ江戸三郎鳴物停止二日

十二日兒玉胤外六人數年近侍勤勞ニヨリ各銀五枚下付

十六日記録所役國司右中辭職ヲ許ス山口代官高洲平兵衛ニ目付役ヲ命ス長沼作右衛門ニ山口代官ヲ三田尻頭人神保與右衛門ニ直目付ヲ入江彌兵衛ニ三田尻頭人ヲ命ス

十七日萩町人梅屋吉右衛門赤間關伊崎三田尻大濱關作用務ヲ命シ竣功ニヨリ乞願アリ他國人出會ノトキ帶刀伊崎大濱ニ於テ絹布ヲ許サル十二月二十六日其身一代大年寄格ト爲シ年始謁見及門松ヲ許サル

廿日貨幣之制發令アリ其文略德川實紀

廿九日葵ノ紋ツキタル道具寺社ニ寄付スルノ制ヲ定ム其文略德川實紀

八月十五日萩城指月山ノ松雷火ニ罹ル

廿日大組頭役渡邊太郎左衛門辭職ヲ許シ根來帶刀ニ後任ヲ命ス

廿二日立野權右衛門中村半右衛門ニ撫育方銀子方ヲ命ス

廿三日大照院役寺少キ爲メ寺役勤メカタク末寺二寺院増加ノ乞願ヲ容レ大島郡福正寺ヲ臨江院ト改メ都野郡大願寺ヲ歡信院ト改メ末寺ト爲サシム

九月十一日德地紙漉所用人能美甚之允年々用紙提出セシニ多額ノ仕入銀ヲ領收シ用紙ヲ收納セス公損ニ至リタルニヨリ高二百石下地ニテ給與アリシヲ沒收シ扶持方二人米十二石五斗下與三十人通ニ加ヘ向後用務ヲ命セストナリ

同日百石以上縁職再婚ニ關シ遠近方へ訓示左ノ如シ

百石以上縁組再婚之儀は當役中聞届にて相濟候處前々不及御聞儀と候而難被差免願出候ても聞濟相成たる儀も有之様相見候再婚は事輕儀趣によつては御了簡も可有之候へ共一體被聞召候縁談再婚に付不及其儀事候へは不及御聞儀込素難被差免筋を當役中了簡にて聞濟可申儀にて無之候條向後引請之役座にて其詮議肝要可相心得候事

同日桂又兵衛ニ遠近方暫役ヲ命ス

十三日普請奉行ヲシテ上水及道路ヲ管セシム 德川實紀

廿六日鹽谷源左衛門本名小幡ニ改稱願許可アリ

廿八日公深川ニ至リ十月二十八日歸城

九月此月令ス德川十五代史

大目付え

一公儀御祝儀事並家督之爲祝儀老中招請可有之面々年數多相立候も有之如何成儀候大體五箇年程之内には招請も可有之事に候併故障等にて延引有之候は、其節之届可有之候且幼少病氣等にて御目見も無之分は御目見相濟候上之儀に可有之候

九月日不詳三田尻田島宰判ヲ中關宰判ト政メラル後三田尻小郡兩相府年表

十月十二日夜見島郡本村失火民家百七月焼亡牛四頭死ス

十九日飯田七兵衛下村彌三右衛門ニ撫育方ヲ命ス中屋四郎右衛門ニ撫育方本締役ヲ命ス坂七左衛門ニ撫育方筆者本役ヲ命ス

廿一日ヨリ毛利大和守山口湯田入湯十一月朔日歸邑

十一月三日有馬上總介頼貴勢世子へ納采重就公第六子

八日山縣勘右衛門ニ大檢使役ヲ命ス

十日兼重五郎兵衛目付役ヲ免ス

十五日公毛利織部嫡子彦次郎老中國司主税嫡子内記八組頭井原主税寺肚奉行穴戸大學山内新右衛門ニ諱字ヲ賜フ

廿三日勢代子有馬上總介頼貴高輪三田邸へ入與婚儀ヲ舉ク

十二月二日有馬上總介及夫人來駕ノ式アリ

三日山縣彌八長屋頭人暫役ヲ罷ム

十六日兒玉源右衛門ニ目付役ヲ命ス

同日大組佐伯八郎右衛門末家佐伯彦助發狂禁錮ノ件ニ關シ血族へ協議ヲ爲サ、ルハ遠法ニヨリ家祿沒收

十九日鷹捉ノ鶴ヲ賜フ郵送萩城ニ至ル翌六年正月四日ナリ

廿一日酒造石押ニ關シ盡力公益ヲ供シタルニ依リ高洲平七ニ銀十枚羽仁五郎左衛門ニ同七枚高杉又兵衛ニ同五枚下付

廿八日徳山隠居毛利山城守廣豊惣髮名ヲ茅山ト改ム

同日大組頭國司備後辭職留任所有ノ器物公收ニヨリ金百兩下付

同日梶山辰之助保福寺軸物竊取逃亡ニヨリ給米沒收

晦日營中座班ヲ定ム其文左ノ如シ德川實紀

仰出されしは萬石以上座班諸席混合の時はこれまでの如く封邑の多寡にしたがひ邑入同きは家つぎし年月前後をもて序をなすことは申までもなし御側用人雁間詰奏者番の子ども等座班定まらざるよしきこゆ今よりのちこの輩は菊間縁類詰の上座たるへし普第外様の内菊間縁類詰より封寡きともがらはその座をかへまたは對座又はかたはらに座す共なすべしとなり

是歲春來屢風雨入夏亦早魃國內田圃損亡高十二萬九千三百三十石家屋倒塌六十七戸

明和六年己丑正月公萩城ニ在リ

二月十一日山根七郎左衛門年來著述ノ文集開板ノ意思アルモ費途ニ多額ヲ要シ又先代以來精勤老體苦勞ニヨリ金三十兩下付

十六日桂道孚保死去本家三郎左衛門扶持成中ニツキ上使ヲ止メ奉札ヲ以テ香奠銀二枚下付

同日夜大島郡久賀村失火民家二百九十二戸焼亡

十八日加判宍戸河内兄弟他國縁職ノコト當役中へ協議書ヲ提出セリ

廿五日農民徒黨ヲ禁ス令文左ノ如シ大目付回狀

諸國百姓共願之筋有之候は、名主村役人等を以定法之通可相願儀に候處大勢致徒黨候段不届に付自今爾右之通相心得可申候若心得違致徒黨候は、可取上願にり共不及沙汰無取上其上急度仕置可申候右之趣兼而御料私領百姓共え御代官領主地頭より可相觸候 右之通可被相觸候二月

遠國百姓共願を合所々にて寄合手段を企廻狀杯を出し外村々之者共も趣意は不辨して不得止事罷出大勢集村役人之居宅又は遺恨に存もの共之家作並諸道具を打損し吟味に相成候上にて數箇條之願を申立候類も有之候得共公儀を輕領主々々にて申宥穩便に取鎮候儀を專要に致し候故百姓共かさつに相成及狼藉不法之儀は勿論之事に候得共右體徒黨を結ひ強訴を企及狼藉者共を手弱取扱ひ候ては外場所にも見習候様に可成行哉以來御料所之百姓共騷立候は、最寄之領主よりも人數を出し私領にて騷立候は、其領主又最寄之領主よりも人數を出し手強打散し手に當候ものともは搦捕願之趣は理非之不及沙汰取上不申他所之引合有之は差出一領限に候は、其領主にて遂吟味仕置之儀可被相伺候萬石以下之知行所騷立候節も同様に可被相心得候以上二月

右之通萬石以上之面々え可被相觸候萬石以下にても知行所百姓騷立候は、右に準し最寄領主へ早々懸合申合可取計旨可被相觸候

廿八日羽仁五郎左衛門那奉行ヲ免シ與番頭格トナシ仕組用掛ヲ命ヌ板本伊右衛門

ニ那奉行ヲ命シ當職手元役ヲ兼シム矢島作右衛門ニ所帶方ヲ命ヌ勘文方武藤孫右衛門ニ所帶方兼務ヲ命ヌ

同日内藤十兵衛旅役方在勤中同僚井上庄兵衛惡計アリ逃亡セシ爲メ巨額ノ公損ヲ生シタルニヨリ給米減少隠居ヲ命ヌ支配所役芦田吉左衛門遠近付並扶持方成ノ輩へ貸銀ニ關シ曠職ノ科ニヨリ逼塞ヲ命ヌ

三月三日訓示ニ通左ノ如シ

御扶持方成衆は抽而勝手相迫無據御奉公差止候儀勿論當時一統潤澤には不相成事に付旦々も道付相成候ては出勤之可有覺悟候處不心得に打過還而不愼之爲體も有之哉儉約中不相應之願申出候衆も有之不埒之事候且在郷住宅等は居形不相應之心得も有之様相聞候向後屹度相愼出勤之可有覺悟候不心得之衆於有之は可被相答候事

江戸御番手其外於于時被差登候大少身之面々町方にて買懸り仕置罷下候ては一向不沙汰によつて毎々賣主より訴出御厄害に相成御外聞も不宜儀若公訴にも及

ひ候ては甚御爲不宜儀候條右懸り相之分は早々差登埒明可申候向後右體之作廻
於有之は一廉可被相咎候此段内意申達候事

五日手元役高杉又兵衛奥山代困窮ニツキ仕組惣都合役ヲ命ヌ大坂留守居粟屋六郎
右衛門其身一代表番頭格ト爲ヌ

六日公發駕東觀七日大濱新拓地巡覽

八日公儀人都野彌右衛門江戸ニ於テ逃亡後逮捕國元へ護送入牢ヲ命ヌ嫡子三之助
遺流ニ處シ家祿高三百一十一石一斗沒收

同日上水並道路之制發令アリ其文略 德川實紀

十七日阿武郡江崎浦失火民家二百七十三戸燒亡

十八日火災之制發令二通アリ其文左ノ如シ大目付同狀

火事之節近頃は馬上之火元見多出消防之障に成候間火口被乗込申間敷旨寛保
元酉年相觸候彌右之通相心得可申候火元迄不相越候ても火事之様子も可相知
事候間火元一二丁も手前より見請場所へは決而乘込申間敷候

一定火消防大名請場に相詰居候内火元見差遣候面々も有之由に候向後馬上之火
元見差遣候儀可爲無用若不差遣候而難成節は是又前條之通可被相心得候
右之通可被相觸候三月

近來者火事場え見物箇間敷もの別而多馬上にても出候様子に相聞候向後堅可
爲無用候右體之儀見請候は、其場へ出候御目付御使番相改姓名承札し申出候
様申渡置候旨寶曆二申年相觸候彌右之通相心得可申候

一火事之節親類其外知る人之方え爲見廻萬石以上を初其外被參候面々も有之様
相聞申候火事場混雜いたし消防之障にも相成候小身之面々は自身にも不能越
ては相成間敷並近所出火之節親類等罷越世話等無之候ては相成間敷候得共家
來をも遣相濟候程之面々は自身被參候儀は無用に候火鎮候以後被參候儀は勝
手次第尤場所之障に不相成様可心得候

右之通可被相觸候三月

廿一日吳服方兩人所本締役銀子方用紙方吏員公銀窃取ノ大疑獄起ル檢舉札彈ノ結

果犯罪ノ輕重ニヨリ處罰人員左ノ如シ

斬首

高野吉左衛門外三人

切腹

吉左衛門嫡子

齋藤與三外四人

家祿沒收

久芳庄左衛門外十一人

家祿減少隱居段下

神代作右衛門外六人

遠流

庄左衛門嫡子

久芳要人

逼塞

二宮吉左衛門外十六人

遠慮

山崎新八外四人

幼少ニツキ親類預付

與三嫡子

齋藤松之助外七人

右之外細工人中間其他磔誅伐遠島等ニ處セラル

二十三日先是友子重就公松平土佐守豐雍ニ許嫁今朝納采尋テ鍛冶橋ノ邸ニ入與婚

姻二十八日婿君夫人皆來駕ノ式アリ

總テ婚姻成ルノ後大城ヘ拜謝爲例亦略之

四月十五日公着府

十七日夫人登代子春來感冒臥病勢日ニ篤シ是日午牌終ニ卒去二十二日幕使仙石

越前守來テ公父子ヲ弔セラル公父子名代松平日向守毛利大和守ヲ登營拜謝セシメ

ラル夫人死去ノ發喪十八日ニシテ

十八日昨十七日來ル辰年四月將軍日光社參ノ發令ニツキ諸大名惣出伺公參府拜謝

以前ニヨリ使者ヲシテ申告セシメ世子病アリ登營ナシ

廿四日夫人ヲ瑞聖寺ニ葬ラル夫人立花飛騨守良淑女

廿七日公喪忌中ニヨリ兩九ヘ端午之時服獻納延期忌明ノ後納付スヘキヲ申告セラ

ル

廿九日鷹司輔平室惟保君重就公卒ヌ年二十四法名妙池院洛陽嵯峨二尊院ニ葬ル使

者ヲ京都ニ遣シ弔喪香奠ヲ贈ラル又夫人ノ遺髮ヲ得テ萩龍昌院ニ葬ラル

五月八日大組物頭野村與三兵衛平川吉兵衛ニ目付役ヲ命ス

十三日公既ニ喪除是日幕使來慰十四日登營謁見獻物如例

同日端午ノ時服獻納如例

十四日毛利大和守伯母實ハ八條少將室死去

十五日大坂藏屋敷名代薩摩屋仁兵衛病死嫡子善二郎吾藩立入且屋敷名代及扶持方

米下付乞願ヲ容レ總テ仁兵衛代ニ異ナルナカラシム

十六日小幡小平太ニ公儀人ヲ命ス

十八日物頭及矢倉等へ訓示左ノ如シ

御中屋敷御門番御中間之者被差出置候へ共御引せ被成向後足輕被差出左之通被

仰付候事

足輕 八 人

但御本門切手御門並御添屋敷

右之通御中屋敷御門番として被差出此内より晝夜時廻尤夜中拍子木を打外輪水

打張番等相兼所勤被仰付候勤方其外於心得は時々差引可有之事

御中屋敷御門番御中間之者御引せ被成向後左之通被仰付候事

御中屋敷新辻番

兩組 三 人

右之内より夜中半時廻尤四ツ半時八半時小屋前起廻り稻荷社番をも相兼所勤被仰付候事

麻布御屋敷夜中時廻拍子木向後御門番足輕え御打せ被成候事

廿五日吉川左京經永室岩園ニ卒ス法名瑞連院吉川系譜

六月二日矢倉へ訓示左ノ如シ

覺

御 部 屋 御 門

右物色之儀は印鑑を以勘過被仰付候條相印受取可置候事

但御臺所夜着部屋より之儀は時々御達送りにて可勘過候事

一諸士中召連候下人え持せ候物色之儀は御門番之者え無餘儀於相断は通可申候事

一藥箱文箱挑灯雨具等は不及切手見計を以可勘過候事

一作事方諸道具は立肝煎を證據にして通可申候事

一夜中暮六時より明六時迄之儀は御門締置名答を以可勘過候事

右之通締被仰付候條此外番人了簡之作廻不仕候様手堅可被申付候事五月

六日毛利能登守匡滿室日ヶ窪邸ニ卒ス法名麗章院

八日粟屋市左衛門姫君婚儀用務苦勞ニヨリ紋章上下下付

十三日令ス徳川十五代史

日光參詣ノ費用享保十三年ノ例ニ據リ猶節減ヲ加ヘ各條下ニ朱書シテ上申セシム

同日後房出入ニ關シ訓示左ノ如シ

御親類様方ヨリ女中之御使

御中屋敷之

女中

日ヶ窪

局

榮智

下谷之

自清

養松

右御錠前より内罷通候事

瑞泰院様被召仕候御届之女中

右同斷

一 只今迄罷出來候面々向後被差留候御用之節は時々可被召出候下より罷出候儀は被差留候事

一 御裏御殿え御出入之女中比丘尼瑞泰院様御届之者は格別只今迄脇より御出入仕候麻布之面々にても向後御用有之節は可被召出候常々御物音無之候は、下より罷出候儀被差留候事

一 御裏御殿此先相勤候女中え近親類にても御錠前より内え通し相對之儀一向被差留候宿本其外よりにても無據用事有之相對罷出又は使等にても差越取次にて不相成直對不仕候ては不相叶儀有之節兼而御作法之通締り之役人承届差圖を請御錠口え出候而役人立合之上相對可仕候事

一 御錠前より内え出入兼而被差免面々之儀名前可被差出候條其人柄罷出候節は

時々役人承届通可申候事

十五日目付役木梨勘右衛門和田倉夫人裏老ヲ命ス

十九日辻番所勤務足輕御門出入ニ關シ訓示左ノ如シ

辻 足 輕

一平日交代増番等之儀は可爲定札事

一辻其外外向急御用にて公儀所差圖を以差出候節は無切手にて通關被仰付候尤
歸隙取候歟或は人數も罷出不審之儀も候は、御門番より御目付所え可相届候
事

一右急場にて出張之者辻見渡を離他え出張り日數も掛り交代をも仕候事候は、

滞留切手可差出候事

右之通令沙汰候事

廿三日和田倉夫人 松平屋後守室宗康公養女 袖留公ヨリ名齡ノ字進セララル

廿四日兒玉市之助和田倉夫人裏老ヲ免シ與番頭格ト爲ス

七月十二日關老阿部伊豫守死去使者ヲシテ關老田沼主殿頭へ伺候セシム

十六日小姓役兒玉糺數年地江戸在番關如ナク代番加番等精勤ニヨリ金三兩下付

廿五日葵ノ紋ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

御寄付等にて葵御紋付之品有之候寺社より申出候は、京都大坂之分は京都大坂
町奉行申出候様仕町奉行より寺社奉行え申越候様可致候遠國之分は御料は御代
官え申出御代官より御勘定奉行え申越御勘定奉行より寺社奉行え可申達候私領
之分は地頭迄申出地頭より寺社奉行え申達候様可致候

右之通向々え可被達置候七月

右ノ回狀ニ對シ幕府へ提出書左ノ如シ

覺

一葵御紋付之戸帳 一張

京建仁寺末寺長門國妙悟寺末寺

周防國熊毛郡室積

蛾眉山 普 現 寺

右普現菩薩え殿有院様御代御寄付被仰付置候戸張御修葺相成江戸牛込穴八幡別當放生寺取次を以寶曆十三年御本丸御奥より御寄付相成候

東叡山末寺周防國山口

權現様御宮別當 水上山 眞 光 院

京建仁寺末寺長門國萩

御代々様御位牌安置 正宗山 洞 春 寺

能登國總持寺末寺長門國大津郡

瑞雲山 大 寧 寺

右三箇寺え拜禮爲旁權現様御社並御代々様御位牌安置仕置候に付御神器御佛器古來より葵御紋付來候

京都智恩院末寺長門國萩

長榮山 常 念 寺

右大膳大夫先祖長門守秀就妻は三河守秀康卿御息女付秀康卿御位牌安置仕古來より葵御紋付候佛器有之候

京淨花院末寺長門國萩

金沙山 龍 昌 院

右長門守秀就妻其外越前家より嫁候婦人之菩提所にて佛器其外古來より葵に丸付來候

右御寄付等にて葵之御紋付之品所持之寺社申出候様先達而御觸出之趣を以大膳大夫領内周防國長門國之内僉議仕候處前書之通御座候此外毛利政次郎え配地之内御紋之品所持之寺社有之分は彼方より可申上候以上

月 日 御名内 御 留 守 居

廿八日鷹捉ノ雲雀三十ヲ賜フ

八月二日去ル七月二十八日及本月朔日ヨリ是日ニ至ル大風雨怒潮國內田浦損亡高十二萬七千三百五十八石家屋倒壞四百八十三戸破船十艘

大濱ノ堤坊亦四十間壞決急ニ役夫ヲ出シ修築セシム

十三日^{後十日}毛利能登守匡滿日ヶ窪邸ニ卒ス年二十二法名淨雲院^{第三公}

同日毛利能登守病卒嗣ナシ政二郎君^{重就公}ヲ嗣トセンコトヲ乞願セラレ

廿六日江戸大風深川三十三間堂頽破^{徳川實紀}

廿七日加判毛利内匠廣胖死去嫡子勇之進へ弔書ヲ賜ヒ香奠銀三枚下付十月五日毛

利勇之進へ家督ヲ命シ知行高一萬五千九百八十五石八斗二升九合ノ地ヲ領セシム

九月五日從者之制發令左ノ如シ大目付同狀

惣而召連候供廻りかさつに無之様度々被仰付候處又々近來かさつ成も有之様
相聞先挾箱持候者は異風に取拵別而かさつ成も有之徒之者間遠に召連候面々
も有之往來之妨にも相成候面々急度被申付重立候家來相制候は、左様には有
之間敷處如何成儀に候向後彌がさつ無之先挾箱持候者は在所者召遣徒之者も
間遠に無之様召連佐法能於途中も相互に片付障に不相成様急度被申付候以來
如何成儀も有之におゐては家來は申に不及主人之可爲越度候條此旨堅可被相

守候

一供廻り徒之者風俗不宜中間共は異風に取拵候故別而かさつに成候向後急度相
止可申候主人々々申付候共請人共より斷可申達候奉公人へも其段可申付置旨
請人共へ町奉行より先年申渡候處又々近來右體之儀も有之由相聞不届候彌先
年申渡之趣急度相守以來右體之儀於有之は當人は不及申請人共迄答可申付旨
猶又請人共町奉行より申渡候條此旨も可被相心得候

右之趣可被相觸候九月

同日供步行ニ對シ戒飭訓示左ノ如シ

御 供 步 行

右種々持方難澁之筋を以半間中申合頭立何角と申慕候族も有之右に付ては不得
止事候はて數多令同意毎々疎遠等申懸不折相之様相聞不埒之次第候殊に結徒黨
候儀は御制禁勿論之儀其上御手先旁可相慎筋候處甚不心得之至候隨分令一和以
來相慎穩便之心得可爲肝要候若此上領細之儀申立不心得もの於有之は急度可被

相符候事

七日記録所役木梨平左衛門世子邸へ付セラレ椋梨新左衛門ト交代セシム

同日三浦内左衛門粟屋丹治杉山十左衛門去ル酉年銀一貫目宛御意銀借命セラレシニ其後勤功ニ對シ今回六百目増加シ各銀一貫六百目下付

十六日大目付回狀左ノ如シ

江戸表より他國え錢多差遣間敷旨先年相觸候得共當時鑄錢定座被仰付並眞餘錢も吹立諸國通用之爲に候之間以來國々え錢遣之儀勝手次第たるへく候

右之通可被相觸候九月

廿四日老中加判実道備前死去嫡子八郎へ弔書賜リ香奠銀二枚下付

十月朔日吉田半兵衛外五人へ御意銀借井原彦右衛門外八人へ了簡銀借命セラレ

七日公及谷播磨守政次郎君ノ名代ヲ大城ニ召シ閑老兩家ノ乞願ニ準シ能登守遣領政次郎

相續スヘシノ台命ヲ傳ヘラル

同日井上與十郎ニ目付役ヲ命ス

同日松田小内妻紋章上下抵當ニ交付セシコト顯ハレ小内ニ逼塞ヲ命ス

十八日若年寄ニテ大頭役井原孫右衛門老中ニ任シ加判役ヲ命ス手廻頭粟屋帶刀ヲ

若年寄ニ任シ大頭役ヲ命ス大組頭兒玉三郎右衛門ニ手廻頭ヲ命ス楢杜木工ニ大組

頭役ヲ命ス

廿二日松原十郎右衛門用所役ヲ免シ御休息所頭人役ヲ命ス尾崎新兵衛大檢使役ヲ

免シ御休息所頭人役ヲ命ス

廿四日原田小右衛門ニ矢倉方ヲ命ス

十一月朔日鷹捉ノ雁二隻ヲ賜フ

十一日慈性院弘元公息女相合御方井上右衛門大夫元光妻二百回忌蓮花寺ニ於テ法會執行

十三日政二郎君日ヶ窪邸移居ニツキ訓示左ノ如シ

覺

一政二郎様日下窪御引越被成候付各儀御當分爲御供被付越候御幼少之御儀御機嫌相之儀は勿論御成立肝要奉氣遣可被申合候事

一此度被付越候諸士匹夫に至迄行規作法能相心得御彼方様衆一體之心得にて所
勤被仰付儀候條随分折相能申合御家法之旨相守假初にも權柄を不差構謹而遂
所勤候様可被申付候事

一女中被付越儀候條男女之差別相立猥之儀無之様可被申付候事
右之通存其旨御付役人末々迄手堅可被申渡候以上

丑十一月

梨 頼 母

十四日江戸邸内役員各邸祝式ニ關シ訓示左ノ如シ

當 役 御手廻頭 記録所役

奥 番 頭 同 格 御直目付兩頭人

御ヒ醫

右御休息様御仕成宜被仰付候付此度計御祝儀差上候事

當 役 御直目付兩頭人 御ヒ醫

右御休息様え向後明暮八朔其外廉有之節御祝儀差上候事

當 役 御手廻頭 御直目付兩頭人

御ヒ醫師 御付醫師

右列姫様定二郎様え向後明暮八朔其外廉有之節御祝儀差上候事

右之通被仰付候條無相違可有沙汰候事

丑ノ十一月

十五日政二郎君日ヶ窪邸ニ移居八月十六日新橋中屋敷ヨリ日ヶ窪邸へ引移ノ由聞老へ申告セシヨ實ハ是日引移

同日江戸御休息所公侍女留地隨願院今ヨリ様ト唱ヘシム

廿日大濱開作創設ニツキ東光寺先々住隠居所三田尻田島ニ在ル庵室へ厚狹郡山野
村淨福寺ノ寺號引寺乞願許可アリ

廿一日列姫政二郎君上屋敷へ移居ニヨリ取締ニ關シ頭人井原四郎左衛門栗屋市左
衛門松原十郎右衛門尾崎新兵衛へ訓示アリ其文略

同日大坂用聞町人上田八郎左衛門病アリ退身弟長十郎へ名跡ヲ讓リ三郎左衛門ト
改名立入ヲ許サレタキ乞願アリ立入ヲ許シ歳元役ヲモ命セラル

廿四日粟屋彌四郎ニ目付役ヲ命ス

十二月九日家基大納言西城ニ移ル十日諸大名惣出仕公父子病アリ登營ナシ

十二日熊谷帶刀老中病死香奠銀二枚下付

廿一日諸臣歳晚家計窮困ノ聞ヘアリ祿萬百石ニ銀百五十目ヲ度トシ貸與セララル、
ノ公布アリ

同日粟屋松二郎病死親族ヨリ桂藏人三男勝三郎へ相續ノ乞願アリ末期ノ法ニヨリ
家祿半額減少セララルヘキモ祖先拔群ノ忠節ヲ遂ケ當時特命アリ他ニ比例ナキ爲メ
二百六十石ヲ給與シ奉公怠ナカラシム

廿六日書院小姓中村忠左衛門本家ヨリ讓與ノ紋章品大番諫早織之助家母拜領紋章
品着用乞願セリ將來他ニ支障ナキヲ以テ其身一代許可ヲ與フ

廿九日養子之制發令アリ大目付同狀

他人養子に仕候儀陪臣浪人之子御直參之親類有之候共願候當人之親類にて無之
候は、難叶候段享保十八丑年相違候右願候親類之當人之有之は又從弟迄之事に

候旨元文元年辰年相違候尤又甥も同様之事に候

右之趣向々々寄々可被達置候十二月

晦日家業人凡下ヨリ養子取組ノコト停止セララル

本記拾遺附錄

此記ハ萩城天守再修梁上之文也明治三年十一月城郭廢止同十年三月有志者之ヲ
春日社殿ニ納メ後來ニ保存スト云

五層城樓再修記

易曰王公設險蓋上古聖人蒞國治民者據天府之地設要害之險乃爲億兆利用除害
也故地五帝三王至今罔弗營築城郭而爲治者也此邦 神武帝創國建都造樞宮以
來城制初興千雉百雉次第開焉降迫戰國結構益精觀臺樓櫓門屏陞郭亡弗悉備焉
而近古有稱天主者往昔未聞其名載籍亦不見乃所謂弩臺戰棚之類而益精密其制
者也世傳天正初清洲氏築江州安土城而建層樓乃效外國之制而稱天主也厥后凡
築城者亡弗有此舉也或書殿主或天守俗說紛紛故今此記唯稱五層樓若一罹震雷

風火之災。而破壞則不得再興也。是以兩郡及浪華名城今偕無焉。我藩營築瀨城。以來凡百六十年。崇樓五層。延袤數十仞。巍々乎孤立上。棟檁桂頭。若或頽倒則已矣。故深憂之。二十年前。有修理之議。雖破中人百家之產乎。弗克支費。以時儉故未果矣。僅施扶顛之功而已矣。而經年之久。愈益傾側。於是乎明和五年戊子秋九月。國行二相奉命。召工局司。促再修之事。而分吏職擇工匠。計人從量財費。約束既定。而緩取材於都鄙山林。馬步舟車。水陸各因便運輸。巨室富豪有山莊者。亦獻竹樹倚疊如山。翌春二月初六。工樓下墜水深若于仞。碧波盈盈。南北兩涯。相距幾百尺。非有羽翼者。寧能超焉。嗟乎匠技之妙。忽架巨木。作通路。直抵樓上。千尺雲梯。遽爾現于空中。公輸子之技。當避三舍。水上如陸運轉。土木瓦石。而衆工相會。設機變之巧。植傾正斜。朽柱攙棟。其他弊材悉改之。新增梁木。柱枝葺以赤瓦。陶瓦用油故其塗用白垩。棟椽窓戶風雨所擊。皆封以銅。雖仍舊貫。殆如改作。確乎如山。不驚不崩。堅固萬斯年。其年冬十月二十八日功竣。願此舉工局官吏。咸能幹盡。工師匠人俱良功。庶民子來攻之。是皆上之令德。而下能化之。無曠日彌久之患。而工省費減。數十年之企口一時成矣。猶用其餘財。修樓下多門櫓。是豈陂池

臺榭。爲遊觀之倫也哉。實有士之要害。而武備之最也。可謂藩廷一大盛事也。翰曹承命。志其山並官吏工匠姓名。以告于來者。五層樓形象。延袤別具。畫故不贅焉。

- 前國相 毛利織部源廣圓
- 今國相 毛利伊勢大江就楨
- 前行相 梨羽頼母平廣云
- 今行相 益田隼人藤原廣道
- 工局司 山田吉右衛門源恒嘉
- 工局監 安武猪兵衛門平知榮
- 大匠頭 佐伯藤右衛門藤原實明
- 營作主事 渡邊吉左衛門源清
- 工師 村上又右衛門勝房

明和七年庚寅仲秋

長藩文學 山根七郎左衛門源清謹志

同 草場周藤藤原安世謹書

御國政再興記所載 五重之天守百四十五年來素返等も無之八九箇年以來は傾きも相見危く候得共御差問之時節故無據取繕延引に相成居候右修補料爲取立御撫育方より御銀作事方へ御修補目論見として最初に渡方被仰付其銀基と相成作事之奉行山田吉右衛門其外出精素返相成候事

明和七年庚寅正月公江戸邸ニ在リ

十七日大目付回状左ノ如シ

年頭之勅使參向之儀以來は二月中參向之筈に候間向々へも爲心得可被達置候月正

廿二日公儀人山名字右衛門ニ肥録所役ヲ命ヌ

廿三日地方老臣ヨリ當職毛利織部病氣辭職ノ通牒アリ公在府中ニヨリ留任ノ爲メ

直目付神保與右衛門ニ歸國ヲ命シ歸途江尻驛ニ於テ織部ノ訃音ヲ聞キ歸府

廿七日昨年十二月十八日來年參府來々年歸國ノトキ薄暮ニヨリ木曾路旅行伺書ニ

對シ不認可ノ指令アリ

同日當職毛利織部死去嫡子彦次郎ニ弔書ヲ賜ヒ香奠銀三枚下付

廿七日ヨリ加判毛利伊勢益田越中井原孫右衛門月番ヲ以テ當職ノ事務ヲ勤ム

同日深川鶴步町一萬八千九百五十四坪ノ地松平伊賀守所有地ヲ今回我藩ニ購求シ

得タリト幕府へ申告セララル

二月十四日江木次郎右衛門外十二人年來ノ勤勞ニヨリ御意銀了簡銀等増額命セラ

ル 十五日定二郎君初テ上下ヲ着ヌ

廿七日毛利勇之進ヨリ毛利内匠遺物軸物二幅使者ヲ以テ獻セリ

二月此月農民強訴ヲ禁ヌ其文略德川實紀

三月七日先是洞春寺洞春公ノ靈殿修營落成今日神靈木俣ヲ神室ニ納メ爾經供養願

四殿ト唱 又本年六月公ノ二百年祭ニ當ルヲ以テ諸臣ニ頒告シ詩歌ヲ獻セシム

九日毛利彦次郎ニ織部跡職ヲ命シ知行高八千六百十八石一斗四升五合ノ地ヲ領セ

同 草場周藏藤原安世謹書

御國政再興記所載 五重之天守百四十五年來素返等も無之八九箇年以來は傾きも相見危く候得共御差問之時節故無據取繕延引に相成居候右修補料爲取立御撫育方より御銀作事方へ御修補目論見として最初に渡方被仰付其銀基と相成作事之奉行山田吉右衛門其外出精素返相成候事

明和七年庚寅正月公江戸邸ニ在リ

十七日大目付回狀左ノ如シ

年頭之勅使參向之儀以來は二月中參向之筈に候間向々へも爲心得可被達置候月

廿二日公儀人山名字右衛門ニ肥録所役ヲ命ス

廿三日地方老臣ヨリ當職毛利織部病氣辭職ノ通牒アリ公在府中ニヨリ留任ノ爲メ

直目付神保與右衛門ニ歸國ヲ命シ歸途江尻驛ニ於テ織部ノ訃音ヲ聞キ歸府

廿七日昨年十二月十八日來年參府來々年歸國ノトキ薄暑ニヨリ木曾路旅行伺書ニ

對シ不認可ノ指令アリ

同日當職毛利織部死去嫡子彦次郎ニ弔書ヲ賜ヒ香奠銀三枚下付

廿七日ヨリ加判毛利伊勢益田越中井原孫右衛門月番ヲ以テ當職ノ事務ヲ勤ム

同日深川鶴步町一萬八千九百五十四坪ノ地松平伊賀守所有地ヲ今回我藩ニ購求シ得タリト幕府へ申告セラル

二月十四日江木次郎右衛門外十二年來ノ勤勞ニヨリ御意銀了簡銀等増額命セラ

ル

十五日定二郎君初テ上下ヲ着ス

廿七日毛利勇之進ヨリ毛利内匠遺物軸物二幅使者ヲ以テ獻セリ

二月此月農民強訴ヲ禁ス其文略徳川實紀

三月七日先是洞春寺洞春公ノ靈殿修營落成今日神靈木俣ヲ神室ニ納メ誦經供養

四殿ト唱 又本年六月公ノ二百年祭ニ當ルヲ以テ諸臣ニ頒告シ詩歌ヲ獻セシム

九日毛利彦次郎ニ織部跡職ヲ命シ知行高八千六百十八石一斗四升五合ノ地ヲ領セ

シム

同日番頭役飯尾右門品行不良巨額ノ負債ヲ爲シ失心自殺後債權主出訴ニ及フ審問ノ結果減祿嫡子安之助ニ跡職ヲ命ス御馬乘高田彦惣罪狀右門ニ同シ彦惣病死ニヨリ減祿嫡子彌七郎ニ跡職ヲ命ス

十二日加判毛利伊勢ニ當職ヲ命ス

伊勢當職任命ニ關シ直目付神保與右衛門ニ歸國ヲ命シ加判以下ニ公ノ意旨ヲ傳ヘシム

加判 益田越中井原孫左衛門

裏判 高洲平七

仕組掛 高洲平七羽仁五郎左衛門榎本伊右衛門粟屋六郎右衛門宮木八郎右衛門

能美吉右衛門武藤孫右衛門

十五日手回頭佐世六郎左衛門ヲ若年寄ニ任シ江戸留守居役ヲ命ス小姓役田坂源太左衛門ニ公儀人ヲ命ス

十六日ヨリ十七日ニ至ル瑞泰夫人公室就一周忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラルル米二十俵銀三十枚納付四月十六日ヨリ十七日ニ至ル東光寺ニ於テ法會執行

十八日ヨリ十九日ニ至ル祐慶院吉元公一子五十回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラルル米二十俵銀十五枚納付

廿一日益田隼人江戸留守居ヲ免シ國元加判役ヲ命ス

廿六日飯田六左衛門數年御内用命セラレ苦勞ニヨリ用所役ノ格ト爲ス右筆岩政六郎右衛門數年用所職務勤勞ニヨリ了簡銀ノ内切錢ト爲シ加増トシテ根帳ニ記入セシム

同日用聞町人三谷三九郎嫡子善吉初テ謁見公ヨリ紋章麻上下白銀七枚世子ヨリ白銀七枚下付

四月朔日中尾源右衛門重富惣左衛門數年御休息所勤務苦勞ニヨリ了簡銀下付
三日ヨリ四日ニ至ル長壽夫人公室就十三回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラルル米二十俵白銀二十枚納付

六日井上族鯉川轍與番頭本役ヲ命ス

十五日當職毛利伊勢佐世六郎左衛門ニ黒印令條ヲ授ク其文略

同日公歸國暇ヲ賜フ

十九日徒黨強訴逃散ニ關シ諸國村里ニ高札ヲ建添ラル大目付同狀

定

何事によらす宜からざる事に百姓大勢申合候をととうとなへととうして強
而ねかひ事くはだつをは。こうそといふ。或は申合村方立通候をてうさんと申前
々より御法度に候條右類之儀有之は居村他村に限らす早々其すじの役所え申
出べし御ほうびとして

ととうの訴人 銀百枚

こうその訴人 同 斷

てうさんの訴人 同 斷

右之通下さるその品により帶刀苗字も御免有るへき間たとへ一旦同類に成候

者も發言いたし候もの名まへ申出すにおいては其科を免され御ほうび下さる
べし

一右類訴人致す者もなく村々騒立候節村内の者を差押へ徒黨に加はらせず一人
もさし出さるる村方有之は村役人にては百姓にても重もに取候者は御ほう
び銀下され帶刀苗字御免さしつゝさしづめ候ものとも、これあらば夫々御ほう
び下しおかるへき者也

明和七年四月

奉 行

右之通御料は御代官私領は領主地頭より村々え相觸高札相建有之村方は高札に
認相建可申候以上四月

右之通可被相觸候

廿三日公江戸發駕京都ニ赴ク

五月七日日光供奉ノ軍役行装ノ制限ヲ定ム大抵享保ノ例ニ同シ鯉川十五代史

十七日右筆岩政六郎右衛門死ス

廿三日公歸城

廿六日細川玄蕃頭室死去世子實方伯母ナントモ目今ノ續相從弟ナルヲ以テ是日ヨ
リ廿八日ニ至ル江戸三郎及三十間堀邸鳴物停止

六月四日毛利大和守萩ニ抵ル廿三日歸邑

五日目付役口羽六兵衛辭職ヲ許ス

七日ヨリ十四日ニ至ル洞春公二百年祭洞春寺ニ於テ修營セララル公衣冠乘轎參詣諸

臣等級順次ニヨリ日々拜參

英雲公祭文

維明和七年歲次庚寅夏六月丙午朔越十四日己未吾 太祖洞春公二百年雙忌嗣會
孫周長國主從四品拾遺補闕大江朝臣重就率執事諸臣恭具清酌庶羞之奠敬祭 公
之靈夫有相氏以降名器假人文柄歸武朝典弗振室町末世四海騁塵 公時幼冲岐嶷
絕倫食牛機發大志告神弱冠登壇威加四隣遺家不造繼統臨民雄略大度拯溺亨屯義
師發憤勵精臥薪南征誅逆夜襲海濱北討雪耻攻守幾春梳風沐雨勞先士臣投醴挾纊

三軍懷仁遠邇思服四方來賓割據十州爾命維新 天子登極土產貢 宸勤 王功順
爵秩駢臻桐鞠幟紋朝章文身 柳營會同班崇且親賜袍承寵錦彩璘彬嗚呼 公無湯
文素僻在藝北壤地偏小且攝大國何與之暴爲政以德濟濟多士魏駢在側任才器使賢
賢曷色運籌豈疏貽厥有則累歲奕葉餘慶罔極 重就小子承乏嗣宗任重道遠寡味何從
矧昇平久奢靡作風百爾用費六府俱空朝聘缺度祠奠不充振貸周急拮据途窮人力不
及唯假冥助昔祈 公靈齋宿竭衷神之格兮誰弗敬崇天降有年闔境告豐人獻餘算朝
野貨通經費事給粟米金銅不虞武備威揚矢弓農省田租臣俸維隆惠被上下澤流西東
嗚呼盛哉 遺德綿綿無涯星霜二百今猶當時吾家宗幹迨他枝枝一木一草咸雨露施
巍巍高恩泰山遐卑珍薦傾國如淮如坻掉彼昊天寧能酬之沐浴齋戒以敬以祗恭獻薄
奠敢盡孝思尙享
是時英雲公新政ノ効驗着々トシテ顯ハル士民歡喜各物ヲ獻シ金ヲ納レ以テ祭典
ノ盛ヲ助ク公訓誠一篇ヲ納メテ以テ子孫ニ貽ス其文ニ曰ク
訓誠一篇ハ原書重就公御讀書一軸トアリ

家久ケレハ則チ忘リ易シ須ク心ヲ祭政ノ事ニ用フヘシ洞春公ノ靈ハ子孫長ク其祀ヲ忽ニスヘカラス凡ソ神靈ヲ輕スルハ亡家ノ基ナリ予今身命ヲ奉シテ公ノ神靈ニ誓ヒ家ヲ興スコトヲ祈ル幸ニシテ上下和シ五穀熟シ二州ノ衆小民モ亦其塔ヲ安ンシ正道ニ由リ國政ヲ行ヒ家聲ヲ起シ家格ヲ進メ壽ヲ以テ終ルコトヲ得ハ是レ公ノ神靈ノ吾ヲ加護スルナリ我子孫タル者能ク此意ヲ體シ殊ニ追遠ノ禮ヲ慎ムヘシ祖先重カラサレハ子孫威アラス宜ク此理ヲ思フヘシ凡ソ政ヲ爲ス士民罪アリト雖モ極惡ニ非サル以上ハ刑ハカメテ輕キニ從フヘシ是レ天職ニ則ルナリ然レトモ亦之ヲ以テ舊典ヲ紊ラサルヲ期スヘシ撫育ノ事ハ若シ洞春公ノ加護ニ因リ以テ其功ヲ大成スルコトヲ得ハ子孫長ク其利ヲ私スヘカラス撫育ノ經濟ハ特ニ之ヲ本勸ヨリ別ツ是レ家ノ爲メニシテ家ノ爲メナラス寔ニ國家ヲ安スルノ一助タランコトヲ冀フニ出ツ子孫タル者宜ク之ヲ思ヒ公役其他重要ノ事アルニ方リテハ則チ撫育ノ金ヲ以テ之ヲ助クヘシ此事予今洞春公ノ祭典ニ際シ特ニ神靈ニ誓ヒテ以テ子孫ノ戒メトス凡ソ子孫ハ能ク之ヲ訓育シテ以テ一材器ノ人

タラシムヘシ是レ祖先ニ對スル第一ノ孝ナリ顯貴ノ家ノ少幼ヲ育スル亦意ヲ茲ニ注キ以テ成長ノ後國用ニ適セシムルヲ思フヘシ之ヲ菊花ヲ愛育スルニ譬ウルニ嚴冬ヨリ霜雪ニ備ヘ春夏ニ至リ培養ノ勞ヲ盡セハ秋ニ至リテ其花ノ殊ニ佳ナルヲ見ルヘシ況ンヤ人ニ於テオヤ諸士ノ子孫ト雖モ亦宜ク此ノ如クナルヘシ小祿ノ士ト雖モ子孫ノ薰陶ヲ婦女子ニ一任スヘカラス凡ソ子孫ヲ育スルハ元是レ祖先ノ遺體君上ノ什寶ヲ保管スルニ異ナラス父兄ニシテ若シ忠孝ノ志アラハ之ヲ導キテ能ク一材器ノ人タラシムヘキハ言フヲ待タス故ニ父兄ニシテ躬親ヲ放僻ノ行アリ以テ子孫ノ模範タルコト能ハスンハ則チ不忠ノ臣不孝ノ子タルコトヲ免レサルナリ歷世ノ肥錄是レ邪正良否ノ鏡ナリ宜ク之ニ鑑ミルヘシ凡ソ忠孝ノ志アル者豈漠然トシテ歲月ヲ徒費スヘケンヤ重臣ハ殊ニ然リトス君臣合體上下一和ト稱スルモ重臣ノ選其宜ヲ得サレハ得ヘカラサルナリ主君志アリ而シテ重臣能ク之ヲ助ケハ主君ノ志益々進ミ政善良ニ歸スヘシ凡ソ人ヲ用フル能ク廉耻禮節ノ士ヲ選フヘシ而シテ重臣ヲ任用スルニハ特ニ意ヲ用フヘシ重臣能ク其

職ニ適スルハ即チ自ラ其身ノ材器ヲ顯ハス所以ナリ我子孫タル者百事皆神靈ニ
誓ヒ其私ヲ用フヘカラス予カ子孫ニ誠ムル所此ノ如シ是皆神ニ誓ヒテ發スル所
ナリ見テ以テ予カ私言ト爲スヘカラスト

案ニ蓋シ公ノ意一面ニハ藩吏ヲシテ妄リニ撫育ノ資力ニ頼ラシメス一面ニハ藩
國ノ大事ニ際シテ藩主ヲシテ徒ニ吝スル所ナカラシムルヲ期スルニ在リ

十一日和田倉夫人松平肥後守督殿 死去年二十四法名光勝院

十五日城中ニ能舞ヲ奏セラレ衆庶縱觀菓子及酒ヲ賜フ又公正殿ニ臨ミ毛利大和守
及一門以下祭事奉行等ニ享膳ヲ賜フ

十八日原善兵衛ニ大檢使役ヲ命ス

廿一日寄組以上扶持方ノ輩ニ訓示左ノ如シ

寄組以上御扶持方

右只今迄は在郷住宅之儀當役中聞届にて相濟候へ共向後相伺候様にとの御事
但大組以下之儀は只今之通

同日大組頭堅田内肥ニ手廻頭役ヲ命ス志道五郎左衛門ニ大組頭役ヲ命ス山内源吾
奥番頭格ト爲ス物頭林仁左衛門ニ目付役ヲ命ス

六月此月養學坊建ツ草舎年表

閏六月三日公深ク諸臣俸祿頻年懸リ米ノ巨多ナルヲ憂ヒ當年ハ旅役出米石五ヲ納ル
外皆給與セラルヘシトノ公布アリ其文左ノ如シ

御意之旨覺

年來御勝手御不如意之上近年非常之御國役等被差湊御家來中え重御馳走被仰付
候處謹而遂其旨御本望之御事候下以困窮之段被聞召上御苦勞思召一先御救被仰
付度重疊被仰付候得共御手段無之今暫出米被仰付にて可有之候依之當年計之儀
は格別之手段被仰付可被返下との御事

近年公儀御國役並に御内證共に繁々廉有臨時之御造佐入除分被相湊年來御差詰
之御所帶彌増御差問之儀候依之御家來中へも多年重き出米被仰付下以困窮之程
別而御苦勞思召當年之儀は廉立候御意をも被仰付度去年以來種々僉議被仰付大

坂古借年經御斷も有之候へ共未御借銀御物成に不引合候尤近年は重き御仕組被仰付諸事御省略之廉多候故旦々御間相候程之事候得共當年も自道之御不足山高之儀にて各別之御手當も無之候といへ共段々僉議被仰付漸高百石に付旅役出米共に十石掛り被仰付三つ成之所務可被渡下段一往御沙汰相決候然處に旅役米之外五石宛之御馳走無際限様有之候ては至而御氣毒之儀勿論廉有御臨時用出來之時は猶重き出米被仰付御間を被爲合之外無之儀に候間此上愈御不自由被遊御堪忍何とぞ當年計旅役出米之外御馳走之出米をは一向被差免度旨再應被仰出假令御新借相増候とも當年に限り盡手段候様にと被仰付候旨有之候得共前段に相見へ候御所帶向之事に付餘分之御新借御引當も無之程之儀偏に各別之仕法を以漸御新借相調候依之當年計り旅役出米之外御馳走出米をは一向に不被召上候右御新借之手段不容易御厄害之筋多御出入重疊之儀候得は委細別紙仕法書に相記御家頼中爲心得旁被仰聞候彼是以此旨を被相考彌以銘々儉約を盡御惠之筋無忘却被遊御奉公候心得肝要之事候

附り旅役出米段分け其外之仕法書別紙被差出候事
右被存此旨組支配中え可被申渡候以上

寅の閏六月

毛 伊 勢
井 孫 左 衛 門
梨 頼 母
益 隼 人
益 越 中

旅役出米割方

- 一 高百石以上 現米五石
- 一 同百石以下 現米四石
- 右御船手兩組
- 一 高百石に付 現米三石七斗
- 右遊近付寺社組

一高百石に付 現米二石七斗

右御藏元近習通より三田尻小船頭迄

一現米十石に付 現米一斗五升

右足輕以下出米之分

一病者幼少御扶持方成之儀は高百石に付現米二石五斗宛之増出米被仰付候事

一同斷高百石以下之儀は夫々段分辻之旅役出米え五割増にして増出米被仰付候

事

一米銀持合之者は勝手次第銀子にて差出候は、和市之儀は二石替にして可差出

候御切錢取之儀は如古法五石和市被仰付候事

一被石へは出米被差免候事

一二人扶持計之者は出米被差免候一人扶持にても切米持合二人扶持より上に相

候者之儀は出米被仰付候事

一御雇隠居料女中之御恩且又御恩同前年々被遣候米銀之儀は出米之不及沙汰候

事

右之通被仰付候條可被得其意候以上

明和七寅の閏六月

仕法書

一此度御新借被仰付と候ても山高之儀ならては不行届事に付當時御不如意之御所帯御引當之餘計全無之儀候然處に近年三田尻其外諸所御取立之御開作所之儀何も古往御沙汰も相成候得共御造佐入餘分之儀故築立相成候所柄に候夫に付素より不容易儀然處に近年御國中其外よりも御馳走之出米申出候故其譯有之分は追々被召上御普請令成就漸一兩年御所務相備候分も有之候得共未年數不相立儀故一廉之御引當に相成儀無之然共元來御思召之旨も往々御家頼中御馳走之出米等輕被仰付公私共に相調候道出來候様にとの御事にて築立被仰付たる儀に付右御開作先は此度手段之基に相成候尤右御開作全備無之内此度は是非被仰付たる御事候へは後年暫之年數難澁之御繰卷有之事に候御所帯向前段

相見へ候通に付廉有御臨時等無之候ても御借銀後年捌方御繰卷引合候迄は高
百石に付旅役出米之外五石之宛之御馳走米をは來卯之年より御仕組方根受に
被仰付置候事

一近年御取立之御開作え對し御家頼中之内先達而遂御馳走候面々えは此度右御
手段を以相調候御惠銘々知行當り前倍增にして可被下との御事に候數十年築
立延引相成居候不毛之地此度毛上付候土地相成候段彼是宜筋有之儀に候最初
御馳走申上候節は銘々所存も有之差出たるにても可有之候へ共此度御繰卷之
基に相成御思召根元之旨にも相叶候一應夫々御賞美をは被仰付候得共猶各別
之御沙汰を以右之通被仰付候事

但倍增にして被下候御惠之分は銀子を以可被仰下候將又御開作え對し御馳
走之出米銀差出追而土地御除を以一應御賞美被仰付候分此上格別之儀に不
被及筋有之に付不及沙汰候事

備考御國政再興記摘要明和七年洞春公二百年祭ニ際シ公士卒慰撫ノ爲メ特ニ撫

育資金ヨリ當年ノ馳走出米ヲ代辨セリ

同日田中九郎右衛門ニ用所役ヲ命ス竹内彌七郎ニ右筆副役ヲ命ス

五日山根七郎右衛門數年儒役苦勞セシニ今回隠居ノ請願ヲ許シ其身一代米二十五
俵給與奈古居九郎右衛門ニ目付役ヲ命ス目付役口羽六兵衛辭職ヲ許ス羽仁五郎左
衛門兒玉市之助ニ長府掛ヲ命ス

九日當役梨羽頼母辭職ヲ許シ公積年功勞ヲ賞セラレ祿千石ヲ加賜ヲ加判益田隼人
ニ當役ヲ命ス

十四日所帶方能美吉右衛門ニ手元役ヲ命シ所帶方ヲ兼シム

十六日目付役粟屋喜兵衛赤間關在番兼役ヲ命ス

十八日手元役兼郡奉行榎本伊右衛門ニ町奉行ヲ命ス所帶方粟屋六郎右衛門ニ郡奉
行ヲ命シ所帶方仕組方ヲ兼務セシム町奉行國司庄左衛門ニ大坂留守居役ヲ命ス遠
近方境忠左衛門ニ藤元兩人役ヲ命ス桂又兵衛ニ遠近方ヲ命ス武藤吉右衛門ニ所帶
方ヲ命シ仕組方正據物改方ヲ兼務セシム安武猪兵衛寄組以上所帶差引方ヲ命ス佐

藤與三左衛門所帶方ヲ免ス

十九日公生誕日十一日ナルモ和田倉夫人死去ニヨリ閏六月七月ハ二十一日トシ八月ヨリハ向後十五日ニ改メラル

廿二日手元役高杉又兵衛ニ大坂留守居役ヲ命シ來秋國司庄左衛門ト交代セシム八谷源左衛門京都留守居役ヲ命シ今冬高須三郎兵衛ト交代セシム有倉三郎左衛門ニ上關代官役ヲ命ス

廿六日梨羽頼母家臣山本源五左衛門ヲ馬醫ニ採用シ米十五俵給與

廿七日夜熊毛郡平生町失火民家百六戸焼亡

七月六日諏訪九郎右衛門梨羽六左衛門ニ目付役ヲ命ス目付役井上肇ニ公儀人ヲ命ス

八日毛利彦次郎織部遺物軸物聯幅探借ヲ献ス

十二日毛利秀之助ニ加判役ヲ命ス

同日數年近侍精勤ニヨリ赤川任外六人各銀五枚下付

十六日大坂用聞町人廣岡久右衛門其身一代大坂藏屋敷留守居格ヲ命ス待遇ニ關シ大坂邸吏伺書ニ江戸老臣指令左ノ如シ

一 大坂御用聞之者留守居格被仰付候御仕成之儀を傳承候處町家御用聞之御あいしらひに格別相替事無之大坂御屋敷内計之儀にて其外は一向相替儀無之由御座候殿様御往來之節御目見罷出候ても留守居檢使一所えは不被差出尤候惣御用聞之類にても無之御迎送り御目見をも被仰付候得共留守居檢使役人中をば引はなし一人立に罷出候由惣御用聞之分は其跡え被差出候由

一 留守居檢使挨拶相之儀只今迄も此方よりは等輩之挨拶にて御用聞よりは隨分懇歎に仕候留守居格被仰付候ても相替儀無之候座並之儀は只今にても一間にて向ふ座に着候格式直り候ても同様之儀と相聞候

一 御用銀等被仰懸候時は惣之御用聞とは違先達而右之者を此方惣談人數にして追而惣御用聞中へ被仰懸候時は亭主方に成申合候故御用聞中難澁之儀も無之請心能甚御持方宜儀と相聞候少々之御用銀等は右之者曳請内輪にて申談口入

銀をも仕候故御用達中え繁々被仰懸候儀就無之大坂表評判能御持方宜儀と奉
存候筑前様方にては鴻池善八儀御内輪仕組筋をも御聞被成御所帯筋之儀に付
ては留守居同前之機被仰付候故一入御調達事入はまり致出精候様相聞候
一右之通之格式に被仰付候時は御門往來之節留守居檢使同様に御門番致下座候
其外役人中勤相等は行懸之通相替儀無之由
一御合力米之儀は御家來中え被下候見渡にて其年々之御馳走之差引を以勘渡相
成候由只今此御方之分は歩引にて被下候得共以來は右之通御家來中同前に勘
渡可被仰付哉
一御往來之節獻上物之儀は只今迄之通に仕候由拜領物之儀も行掛之通に被仰付
候様相聞候一切御あいしらひ之儀は町家之格にて御家來中は似寄たる儀は少
も無之御屋敷内計之儀にて御座候
一右之格式に被仰付候儀脇々之分は其身一代奉行格留守居格等に被仰付候様相
聞候此御方之分も一代に可被仰付哉

右之廉々筑前様方之被仰付を内々にて承合申候其外も太概右之通にて可有之哉
然共必脇々様之通にて無之候ても相濟可申儀と奉存候事
刎紙指令

本書之通久右衛門身柄一代大坂御藏屋敷御留守居格被仰付候尤向後御用銀等
諸町人え被仰懸久右衛門亭主方に罷出申談候節も此御方御家來と座席入交り
不申様に被仰付候其外廉々可爲本文之通候事

十八日松平周防守嫡左京亮始テ國內ニ入ヲ賀シ使者ヲ石州濱田ニ遣サル至十一月濱田
使者來ル

廿五日公女君侍女等ト別館ニ遊ヒ萩町濱崎等ノ市民角能ヲ臨觀セラル

七月小畑へ鹽焔藏ヲ建ツ相府年表

八月朔日天正中東照公入城ノ支干相當ヲ祝シ宴ヲ賜フ德川十五代史

七日後房外科醫岡田一入先代以來勤務八十歳ニ至リ辭職ニツキ銀十枚下付

十四日長崎町人長門屋傳助父宗淳以來立入ヲ許シ長崎ニ於テハ勵精用務ヲ辨達ス

ルニヨリ紋章上一具銀二枚下付

十七日公復女君ト河手ノ別館ニ遊ヒ煙火ヲ臨觀セラル煙火ハ萩町某ノ獻スル所ナリ

廿一日役者嫡子帶刀ニ關シ訓示左ノ如シ

役者嫡子之儀は刀差來候由本人さへ刀不相成間々御心入を以御免之者も請狀之趣有之殊天和三年御書付之旨旁に付嫡子之儀も刀指候儀不相成段は歴然之事候然共只今迄差來候儀は不心得なから流例に任其氣付無之事に付是迄之儀は被遂御宥免候條向後嫡子之儀も刀差於申は屹度可被相答候事

廿六日寺社奉行穴戸大學辭職ヲ許シ乃美伊織ニ後任ヲ命ス

九月三日朔日ヨリ是日ニ至ル仰德明神ノ新祠ニ祭事ヲ修メラル朔日百手射の二日連歌會三日舞樂ナリ靈社碑文

重建太祖神廟記

前此九年寶曆壬午發繼絕興廢之仁政修整祖宗祀典蓋我藩移封之後建國初祖宗之祠於城南春日祠內中有祝融之災寓其主於春日神室廢祀殆一百年豈弗大缺典也哉夫

先王之建國也左宗廟右社稷何其外而遠焉乎於是乎相攸城山西麓安置神主然而以時儉故莊嚴不備只足香火而已蓋本邦俗廟墓皆在佛寺喪祭茲蕪執事若其有大德功者又別建祠祝史奉之今歲脩追遠之事於洞春禪寺有大齋會又將有事神廟而祠堂藐小地亦狹隘不勝行大禮於是北夷山趾西南除吏舍遂爲濶然一淨區而營築祠堂也距南中門若干武樹石華表入而東則有井前設盥盤西燈臺行數武垣途窮而登石階凡數十級間有常夜燈兩臺益田縣原二大夫獻之左右列植華卉梅桃櫻楓或花或葉歲時更互獻色階盡而有門曰隨身左右有木偶入門則東西各有石燈臺中間礮石爲路祗前殿是群下執謁處也稠人盍簪故結構亦弘過殿亦礮石東有寒泉井傍置盥盤又有石階數級左右建銅燈臺國行二相毛利就稱梨羽廣云所獻也其次中殿侯朝拜所也自此經廊直詣神殿上有壇丹楹彫梁畫棟彩壁金玉爛燦致孝于鬼神而莊嚴盡美西出數武有神厨廟外周以垣牆幽邃清肅闕宮有儲穆穆乎神其格兮在焉踧踖如不覺令人戰栗也客歲定之方中勦工今夏五月落成矣於是侯令群下曰昔我太祖物興燕北據葺爾孤城以抗大敵西討北伐弗敢寧居焉威風所加群雄草偃恩波所流庶民子來遂稱霸于關西割據十州二宗尋而堂

構經營雖時有隆替遺烈餘光今猶得大國之封也予小子辱以寡昧承嗣社稷只恐失墜
 鴻業而辱祖先夙夜戰兢不安寢食偏憑祖宗神祐也今幸屬追遠之期俾祝史入京請神
 號於祠部稱仰德大明神且重脩祠堂以竭崇敬昔汝先祖與我先侯同心戮力相共拮据
 貽茲多福汝曹今受其錫世祿綿綿共因其餘業也夫能事上敬神以答揚先德執事諸臣
 謹奉其命今茲秋九月朔至三日恭脩祭儀初日百手射二日陳清酌庶羞之奠三日供
日七五三膳是此邦食饗盛禮令貴戚卿大夫侯親臨祭自今以往九月晦至十月朔以爲祭
戶福原二子代侯及世子行其禮具而有樂日每歲爲例遂命翰曹記其事垂來昆云

明和七年庚寅秋九月

前明倫館祭酒巨山根清謹誌

石碑之裏

上段二行如左

周長國主從四品拾遺補闕大江朝臣重就
 世子從四品大江朝臣治元

中段二六行如左

國相	毛利伊勢	大江就楨
行相	益田隼人	藤原廣道
前行相	梨羽賴母	平廣云
加判老臣	毛利秀之助	大江就盈
	益田越中	藤原就祥
	井原孫左衛門	藤原元俊

下段二十二行如左

裏判兼記錄所役	高須平七	平就忠
奧番頭役	栗屋丹治	源晴雄
	杉山十左衛門	源直行
	井原彦右衛門	藤原師古
營作奉行	山田吉右衛門	源恒嘉

營作檢使

田中善左衛門

源

正珍

營作主事

渡邊吉左衛門

源

清

大工

村上又右衛門勝之

小工

村上伊左衛門義之

大宮司從五位中麻原備前守藤原朝臣德恒

神主正六位吉屋石見守藤原朝臣種盛

佐藤左中藤原豊昌

六日公女君侍女等ト深川温泉ニ浴セラレ十一月九日歸城

十月二十一日公儀人服部七郎左衛門死ス

廿五日暮前大雹降ル草會年表

廿八日公侍女千佐公第十四子多鶴子實母千佐天眞院田中内藏助利和女向後殿ト唱シム

十二月三日飯尾右門負債ニ關係アル御部屋小姓鼓忠左衛門及十川平右衛門逃亡ニ

ヨリ寺社奉行勘定奉行町奉行へ申告左ノ如シ

覺

松平大膳大夫家來

當寅三十七歲

鼓忠左衛門

右去丑の八月七日出奔

當寅三十三歲

十川平右衛門

右當寅閏六月七日出奔

右之者共追々屋敷出奔仕候難差置者に付いつれ之所にても端々迄相尋させ候間見合次第召捕可申候其時之依趣に討捨に仕儀も可有御座候間此段被聞召届可被下候以上

十二月三日

御名内

小幡彦七

六日毛利彦次郎家計窮迫ニツキ本年ヨリ申年ニ至ル七年間引田成ノ乞願許可アリ
八日訓示左ノ如シ

鐵炮札より内にて鐵炮打者有之段相聞御大法相背甚不謂事候依之改而御目付方

え御沙汰相成猶隠し横目をも被差廻候此上於不相止は見當次第嚴重可被相咎候
條此段内意申聞せ候様との御事

九日大檢使檜崎長右衛門御休息所頭人ヲ命ス飯尾孫惣ニ大檢使ヲ命ス佐々木茂左
衛門平田彌兵衛ニ大檢使ヲ命ス

十二日岡左平治右筆添役ヲ命ス

十三日洞春寺願西殿木像厨子戸帳開扉ハ公參謁ノトキニ限ラレタルモ向後名代參
拜ノトキモ開扉スヘシトナリ

廿一日宮崎社ニ於テ神道大護摩宗源行事寶曆九年儉政ノトキヨリ中止セラレシニ
重キ祈禱ナルニヨリ向後神道大護摩八月ハ二夜三日宗源行事正月ハ一夜越執行命
セラル

廿八日訓示左ノ如シ

御開作御取立付只今迄御馳走米銀召上御賞美をも被成下候へとも御開作成立候
付向後米銀等之御馳走不被召上候事

廿九日空米相場ヲ禁ス令文略德川實紀

同日萩城天守修繕ノトキ精勤ニヨリ安武猪兵衛へ銀五枚佐伯藤右衛門へ同三枚下
付

同日粟屋喜兵衛目付役ヲ免ス

同日岩政與兵衛心亂自殺嗣子ナシ先格ニヨリ給米銀沒收

十二月日不詳大坂土佐堀ノ屋敷並地買添

是歲マタ春來屢風雨夏早魃國內田圃損亡高十四萬八千五百九十七石家倒三百四十
七戸

毛利十一代史卷之七十九

大田報助編次

英雲公記十

明和八年辛卯正月公萩城ニ在リ

五日騎射修業熱心ニヨリ粟屋丹治外十人下付金差アリ

十五日城代役兒玉淡路ニ手回頭役ヲ命ス大組頭益田源助ニ城代役ヲ命ス寺社奉行

山内新右衛門ニ組頭役ヲ命ス口羽木工ニ寺社奉行ヲ命ス

廿一日世子毛利大和守邸ニ至リ新年ヲ賀セラル

二月廿一日公明木驛ノ新立山ニ狩シ猪鹿八頭ヲ獲ラル

廿三日吉川監物經倫一柳土佐守末榮女ヲ娶ル

三月朔日儉約令左ノ如シ

御意之旨覺

年來御所帶御難澁之上非常之御造作入等も有之別而御差^由去年御返石之節も被仰聞候通今暫御馳走被召上之外御手段無之御心外なから當年出米被仰付候條此旨下にては相辨儉約を盡可遂御奉公候猶委細之儀は年寄共より可申聞との御事

是時諸臣ノ祿高百石旅役出米共十石懸ニシテ給與セラル

同日大組頭熊谷圖書辭職ヲ許シ口羽助之進ニ大組頭ヲ命ス大組物頭波多野彦左衛門ニ目付役ヲ命ス德見文平長崎開役ヲ免シ鯨頭九郎左衛門ニ後任ヲ命ス

三日回神屯ニ目付役ヲ命ス

同日乃美央井原小七郎ニ各金三兩下付數年地江戸在番關如ナキニ依テナリ磯兼四郎兵衛ニ船軍小形製造ヲ命シ城成ニヨリ銀三枚外ニ銀二百五十目下付尾崎甚兵衛同前金三百匹外ニ銀百目下付

四日十川平右衛門去年閏六月七日江戸ニ於テ逃亡ニヨリ家祿沒收

六日公萩發駕東觀七日大濱新拓地巡覽中國路美濃路東海道金谷驛ニ至ラレシニ大井川増水ニヨリ四月二日ヨリ三日間滯泊

十六日ヨリ十七日ニ至ル瑞泰夫人三回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラル米二十俵銀三十枚納付

四月七日儉約令發布左ノ如シ大目付聞狀

去寅夏中御料所早損之國々多御收納高格別相減御勝手向御入用御不足に相成候付而當卯年より五箇年之間格別之御儉約被仰出候

一諸拜借之儀所司代並大坂御城代は勿論遠國奉行諸小役人は御役被仰付候節は是迄御定之通拜借可被仰付候其外萬石以上以下共不依何事拜借相願候共當卯年より五箇年之間は容易御沙汰に被及間敷候尤去年は諸國一統早損に付銘々儉約を專に可被致候事

但公家衆門跡方其外寺社等江戸遠國に不限拜借之儀は勿論堂社御寄付等も五箇年之間は御沙汰に不被及筈に候事

十一日公着府

十四日用方檢使中原彌五左衛門ニ大檢使ヲ命ス

十五日世子中屋敷へ移居成婚ニヨリ役員進退アリ銀冶橋夫人裏老林宇兵衛ニ世子後房與番頭格ヲ命ス

廿八日新天子即位後統於是使者宍戸河内ヲ上京拜賀セシム獻物如例

五月八日十四日洪水草會年表

十五日一門引田成中藩主祖先法會ノトキ日々參拜セシニ引田成中ハ諸事省略ノ方針ヲ取ルニヨリ滿散ノ日ノミ參謁スヘシトナリ

廿三日農民徒黨ヲ禁ス令文左ノ如シ大目付同狀

可願儀は其村々村役人を以支配之役所え相願可申儀若村役人不得心之筋候は、百姓惣代一兩人にて可願出處近年百姓共大勢申合領主地頭屋敷門前え相詰致強訴候類多有之右之通大勢御府内え立入領主地頭屋敷之門前に集刺往來を妨候段對公儀不届之至候然共愚昧之もの共全心得違候而之仕業故是迄重御仕置にも不申付候以來右體御府内に立入領主地頭屋敷門前に相詰候は、召捕於奉行所吟味之上理非之無差別頭取之者は重御仕置申付其餘之百姓共も縦門訴に不加候共一

同答可申付候若頭取不相分候は、其村々宗門人別帳糺之上門前に相詰候者共之内筆頭之者共頭取之御仕置可申付候

右書付村々にて寫取名主之宅又は高札場村はつれ杯にも張置村役人共得と相辨常々百姓共え委敷利害可申聞旨御料は御代官私領は領主地頭より可被相觸候

五月

六月四日田安中納言宗武逝去將軍忌服ヲ受ク六日諸大名惣出仕公父子病アリ登營ナシ

十八日國司主稅休息死去嫡子内肥へ弔書ヲ賜ヒ香奠銀二枚下付

廿三日大檢使飯尾孫三ニ御長屋頭人ヲ命ス田中善左衛門ニ後房頭人ヲ命ス

七月四日聖堂釋菜ニ關シ大目付同狀左ノ如シ

聖堂釋菜之節前々は參拜並寄付之品も有之由候處近來は左様之儀も無之様相聞候當秋釋菜より春秋釋菜之度々先規之通志次第可致寄付物候且又參詣之儀は可爲勝手次第候

右之趣萬石以上之面々え無急度可被通候

七月

七日證人役檜崎久右衛門ニ川手頭人役ヲ命ス

八月朔日乃美央數年歳男苦勞ニヨリ銀五枚下付

二日鷹捉ノ雲雀三十ヲ賜フ

四日當役益田準人江戸ニ於テ死去病中ヨリ手回頭兒玉三郎右衛門ニ當役ノ事務ヲ

勤メシム十二日準人嫡子富五郎へ使ヲシテ香奠銀二枚下付セシム

十二日本年冬世子舉婚ニヨリ加判毛利遠江^後ニ出府ヲ命ス十一月六日着府翌九

年三月九日用務終了歸國ニツキ紋章吳服一同縮緬綿入羽織一下付

廿日家治夫人死去^宮五十心觀院ト謚ス二十一日諸大名惣出仕公病氣登營ナシ世子西

九へ出仕アリ

廿一日當職毛利伊勢ニ出府ヲ命ス不在中用務ハ加判益田越中井原孫左衛門月番ニ

シテ之ヲ勤ム

廿二日養心夫人三十三回忌青松寺ニ於テ法會修セラル銀十枚米十俵納付

九月七日手回頭兒玉淡路^{五月二十三日}着府命令左ノ如シ

兒 玉 淡 路

右其方事御部屋諸事之御用兼役にテ所勤被仰付候間不依何事一切之儀承届引請
可致沙汰候尤御部屋御手廻組引分被仰付候條爰元居合之面々可致支配候御國罷
居候者共之儀は先只今之通被仰付置候事

一何にても奉存寄候儀有之候は、無遠慮可申上候且又御部屋之儀は御手輕被成
儀に付御納戸之御用其外御表にて當役御手廻頭不及承程之濃々之儀をも閉届
廉立候儀は御表えも相伺萬端掃り能可致沙汰候事

一御廊下女中之往來も可有之候條掃り能致沙汰御部屋付之面々統而行規之作法
狠之儀無之様手堅可申付候若不心得之者於有之は若殿様及御聞御表可致言上
候萬一當座雜差置者於有之は是又若殿様え申上如何體にも申付追而可遂言上事
一御裏向の儀は御裏老被付置儀に候へ共見及氣付之筋も有之候歟又は何ぞ廉有

儀有之節は御裏年寄よりも其方え様子可申達候條諸事無遠慮存寄等可申聞候
猶落着難成筋於有之は若殿様え申伺依品は其方よりも御表え可相伺候事

以上

卯九月七日

同日用所役福原與三左衛門ニ兒玉淡路手元役後房所帶都合ヲモ兼務セシム

八日重陽出仕ニ關シ大目付同狀左ノ如シ

九月九日

一重陽に付御三家始諸大名其外服紗小袖長袴着用登城之事

一西九えは如例御三家始諸大名其外五節句出仕之分計登城之事

右之通可被相觸候

九日大檢使河村伊右衛門後房臺所頭人ヲ命ス世子後房奥番頭格林宇兵衛後房裏老

暫役ヲ命ス

十四日當職毛利伊勢萩出發

同日手廻頭佐世六郎左衛門ニ江戸當役ヲ命ス

十五日三浦内左衛門舉婚入與前ヨリ世子邸ニ付シ婚儀掛ヲ命ス

十七日志道源右衛門政次郎君頭人役ヲ命ス

廿一日宍戸河内ニ御留守中加判役ヲ命ス

廿三日世子喪ニ在ヲ以テ來年ノ日光社參ヲ延期セリ德川十五代史

廿五日公儀人井上肇後房奥番頭格ト爲ス

廿六日京都留守居役高洲三郎兵衛辭職ヲ許ス

十月七日當職毛利伊勢手元役能美吉右衛門着府

九日加判井原孫左衛門江戸留守居トシテ來年三月中出府ヲ命ス梨羽頼母ニ井原孫

左衛門留守中國元加判役ヲ命ス

十八日世子治元君新橋邸ニ移ル

十一月八日鷹捉ノ雁二隻ヲ賜フ

廿日鑿ニ當職毛利伊勢出府儉政事務精査完成ノ結果是日公加判毛利駿河以下諸吏

員ヲ小書院ニ召シ訓諭左ノ如シ

所帶數十年難澁之上年増造佐入差湊大坂其外之借銀高追々相増利納計にも所務皆無同様に成行可申越付寶曆九年自身心を盡仕組申付之處明和三年御手傳被仰渡入用莫太之儀故猶又存寄を以七箇年之仕組を立乍心外家來中並百姓町人えも非常之馳走申付撫育方其外之銀子をも不殘取出繰卷致させ段々手を盡し役人共之心得も宜入はまり遂出精且々ふり廻し相成借銀高は不減候得共御手傳を始數度之婚禮入用繰出相調是迄之通り方も相成祝着之事候然處當時並方之より相も有之故公邊勤向を始諸事造佐入之庶多又々寶曆九年以前之難澁に過半立戻り近年之内には大事にも可及様子と相見其上當年壹岐部屋引移婚禮等之入用大段之儀右付ては以來共且々間を合せ申程之付人も遣置入用等も此内に倍し段々省略之吟味申付といへとも田安之儀は並方と違たる風儀も有之餘分造佐入相増前條之趣旁に付毛利伊勢召登繰卷之令相談候へとも家中を始百姓町人等も年來之馳走彼是別而困窮之儀付馳走等相増様に難成撫育方其外之銀子も及拂底剩去年返

石付ては新借令出來故此上仕組等申付手段も無之至而大切之時節に臨甚以氣毒之事候依之只今よりとくと令思惟來歸國之上は猶先懸けたる仕組之筋委敷遂愈議重儉約之仕法申付我等身柄より不自由令堪忍所存候條於下も無疎儀ながら彌入はまり心力を盡古格流例をも閑假令瑣細之儀たり共儉約筋に付而存寄有之は可申出誠先々之儀を深苦勞に存事候此時節役人中之心得尋常にては不相濟儀付銘々召出申聞間此旨とくと令勘辨下役人末々に至迄委細申聞諸事儉約之手段可
仕事

廿一日朝鮮慶尙道ノ漁船過ル九日見島へ漂流是日萩小畑ニ至ル長崎護送如例

廿二日當職毛利伊勢世子成婚用務アリ暫ク滯府令セラレ手元役能美吉左衛門歸國ヲ命シ國元加判益田越中井原孫左衛門宍戸河内采羽頼母裏判高洲平七以下諸吏員へ傳命書ヲ授ク十二月十七日能美吉左衛門萩着二十一日藏元ニ於テ儉政ニ關シ訓令發布江戸ニ於ケルカ如シ
同日大目付回狀左ノ如シ

町方に致住居候御用達町人等當人異變有之候節は只今迄其支配より檢使遣町奉行よりは檢使不遣候へ共彼是手間取候儀も有之由候間以來は町奉行より檢使遣候間其支配よりも立合之者差出候様可致候御家人に候共町方致住居候分は右同前之事候

右之趣向々え可被相達候

十一月

廿三日手元役井上與左衛門ニ矢倉方兼務ヲ命ス

廿七日大目付回狀左ノ如シ

來月四日釋菜有之候諸家寄付物前日朝五時より八時迄昌平坂聖堂え寄付有之候事に候先達而釋菜之度々萬石以上先規之通志次第寄付物可致旨被仰出候付右日限刻限等相達候間被得其意御同席中不殘様無遲滯可有通達候答之儀は先々銘々より不及挨拶各より萩原主水正方え可被申聞候

二月廿七日

大目付

松平陸奥守殿

松平越前守殿

右留守居

廿八日大檢使山縣勘右衛門ニ用所役ヲ命ス

十二月三日定二郎君丈夫届提出セララルト

七日世子治元君田安中納言宗武卿ノ女節子へ納菜ノ式ヲ行フ

十二日訓示左ノ如シ

節姫様御入輿の上は御前様と奉稱於外向は壹岐守奥方と相唱候様被仰出候事十

八日世子治元君田安宗武卿ノ女ヲ娶ル廿八日登營拜謝

廿六日世子後房裏老暫役林宇兵衛ニ黒印令條ヲ授ク

廿八日手元役井上與左衛門用所役原田十右衛門江戸仕組當初ヨリ擔任勵精調成ニ

ヨリ御意銀一貫目之内二百目ヲ切錢トシ殘八百目共併セラ六十石高ニシテ加増ト

爲シ根帳ニ記入セシム

晦日諸大名從者投鎗ヲ禁ヌ大目付回狀左ノ如シ

近比途中にて鎗持長柄之傘持代り合之節手代り之者へ渡候時分投候而相渡候左候ては若怪我等にても可致出來哉如何に付左様無之様寄々可相違旨松平右近將監殿被仰聞候間被得其意御同席中不殘様無遲滯可有通達候答之儀は先々銘々より不及相抄各より萩原主水正方え可被申聞候以上

十二月晦日

大目付

細川越中守殿

松平相模守殿

右留守居

是歲春來風雨夏亦早魃國內田圃損亡高八萬九千五百七十石家倒壞百四十二戶

本年妙壽夫人二百回忌山口妙壽寺ニ於テ法會修セラル

安永元年壬辰五月廿一日改元正月公江戸邸ニ在リ

十日當職毛利伊勢ヲ召シ料理ヲ賜ヒ服及軸物下付十四日歸藩ノ途ニ着ク

十五日戸川内膳室死去毛利伊勢守政重就公姪ナ

十八日證人役中島作左衛門ニ大檢使ヲ命ヌ

廿七日毛利大和守綠女へ納采

二月六日去年十二月世子婚姻ノ式成ヲ以テ公及世子新夫人ヨリ將軍父子ニ獻物アリ今日新夫人登城セラルヘントノ内訖アリ於是今朝登城將軍及萬壽女君將軍ノニ

謁見將軍ニ縮緬五卷干鯛一宮世子及萬壽女君ニ各縮緬三卷干鯛一宮外ニ硯石絹幅等ヲ獻セラル將軍ヨリ繪子十端緞子三本世子ヨリ縮緬五卷干鯛一宮外ニ漆塗重箱鼻紙袋等數品ヲ賜フ

七日松雲院秀就公第ニ百五十回忌下谷廣德寺塔頭德雲院ニ於テ法會修セラル米五

俵銀七枚納付萩松雲院ニ於テ茶湯修行

十二日當職毛利伊勢江戸ヨリ歸藩

廿九日晦日融芳夫人三十三回忌天德寺ニ於テ法會修セラル米十俵銀三十枚納付

同日午牌目黒行人坂失火此日南風殊ニ甚シ火勢猛烈晡後我本邸及新橋別邸皆燒亡
公奔走指麾新夫人ヲ田安館ニ至ラシメ世子諸公子女君皆麻布邸ニ到ラシメラル房後
ト醫キ中藏門外ニ於テ死セリ凡ソ此火災ニカ、ワシ地幅一里ニスキ長サ五里ニ及
フ燒死スルモノ四百餘人而評定所及上野仁王門山王社亦災ニ罹ル明曆丁酉以來ノ
大火ナリ

同日松平土佐守鍛冶橋邸重就公第四子及及毛利讚岐守邸類燒

晦日三月朔日七日幕府へ申告左ノ如シ

外櫻田私屋敷並新橋中屋敷昨夜類燒仕且又土藏於兩屋敷十三燒失仕候依之御届
仕候以上

二月晦日

松平大膳大夫

外櫻田私屋敷類燒に付麻布屋敷居住仕候依之御届仕候以上

三月朔日

松平大膳大夫

今般中屋鋪同氏壹岐守居宅類燒に付壹岐守妻徳川大藏卿殿火除仕候當分引越候

場所無之付先暫只今之通御彼方滯留爲仕候依之御届仕候以上

三月七日

松平大膳大夫

御國政再興記所載

櫻田新橋兩御屋敷明和火事以後惣構早速被仰付左候而櫻田之儀内々御構且御間
取等諸事若殿様御差圖被遊候様被仰合候事

三月朔日江戸兩邸營作用務ニツキ加判梨羽頼母ニ出府ヲ命シ休息老中清水長左衛
門ニ國元加判暫役ヲ命ス

五日火災ニツキ用所役福原與三左衛門ニ歸國ヲ命シ國元各殿及當役中一門以下及
重役員へ公ノ意旨ヲ傳ヘシム江戸老臣ヨリ國元老臣及大坂留守居高杉又兵衛八谷
半左衛門鴻池善五郎外二人へ口上左ノ如シ

去月二十九日江戸表火災御上屋敷御中屋敷御類燒其上鍛冶橋御屋敷も御類燒扱
々苦々敷儀候上此間之文書に御不自由被遊御來頼中も難儀に罷居候趣略之又小屋詰
にて寔野陣同前之儀甚不謂事のみ難儀難申盡候世上並も有之儀旁此分にては不

相濟儀候條御普請之手段追々可被仰付との儀御座候其外諸御道具仕關旁莫太の御造佐入御當用銀高も過分之可爲入用候依之鴻池善五郎上田三郎左衛門廣岡久右衛門え此時之儀被成御頼候段福原與三左衛門を以被成御意候此内之御所帶向には候得共御普請も被仰付候はて不相叶御道具類とても差向之品々は是又仕關被仰付候はても不相濟候付於此元積申付大概等之員數與三左衛門え申合候との事

高杉又兵衛

八谷半左衛門

右口上前に相見候又兵衛え之御意之旨と太體同前御用聞中えも取繕可申達との御事

六郎左衛門より之口上

鴻池善五郎

上田三郎左衛門

廣岡久右衛門

右口上彌御無異珍重存候然は去月二十九日江戸表火災此方上中兩屋敷類焼に付大膳殿壹岐殿麻布屋敷え早速被致火除壹岐殿奥方には徳川大藏卿様え被罷越候いつれも別而難儀被仕候段御察可有之候松平土佐守殿類焼是以奥方之儀は此方同様之儀家來中差置候小屋々々旁萬端差間罷居候兎角追々にても普請之惠み仕候はては不相叶候此時之儀候條被出御精給候様にと存候委細之儀は追々毛利伊勢より可及御相談候何分宜頼存候との事

六日參府之大名邸宅焼失スル輩其國邑ニ歸ラシム

同日將軍興津左京ヲシテ我邸火災ヲ候問セシム

八日は日ヨリ六月十八日ニ至ル經費節減ノ爲メ江戸邸吏員歸國ヲ命スルモノ五十人

廿一日福原近江先祖越後守廣俊百五十回忌徳隣寺ニ於テ法會執行ニツキ使者ヲシテ香奠銀二枚下付

廿三日尾崎新兵衛後房檢使役以來十年江戸在勤ニヨリ金五兩下付
廿七日大目付回狀左ノ如シ

此度類焼之面々家作之儀惣體花美に無之分限相應に致し棟高く無之地形高き屋敷は猶以右に準し致差略表門之儀も國持大名たり共長屋門致し梁間其外惣而大造に無之様家作可致候
右之通此度類焼之面々え可被相觸候

三月

四月三日訓示左ノ如シ

御當代御紋之品拜領仕所持之面々は勿論其外於家御紋之品持傳有之衆は何れ様之御代先祖何某何役相勤何年何月何々之品拜領被仰付致所持居候段委細申出候様との御事

四月七日ヨリ七月八日ニ至ル江戸藩邸新築工事都合ヲ梨羽頼母ニ命ヌ此他新築工事ノ爲メ吏員任命十九人ナリ

同日手元役井上與左衛門ニ矢倉方頭人兼務ヲ命ヌ
八日類焼ニツキ上使接待ニ關シ申告左ノ如シ

私居屋敷類焼につき當時麻布下屋敷住居仕候上使被成下候得共右於屋敷に御引請仕候依之申上候以上

四月八日

御名

十一日甲州道中高井戸宿ヲ内藤新宿ニ改ム

十四日類焼ニツキ大坂ヨリ江戸へ運轉資金ニ關シ曩ニ裏判高洲平七所帶方武藤孫右衛門上坂用務結了申報ノ爲メ出府セシニ此日江戸出發歸藩ニツキ當役佐世六郎左衛門ヨリ當職毛利伊勢其他ニ傳命書左ノ如シ

申合之覺

今度御類焼に付何角之御用銀何卒御手合候様御沙汰被成候由別而御心遣之儀御座候

一御入用いか程之儀にて可有御座哉兩御屋敷作事其外焼失之御道具等御仕關且

御家頼中えも御氣を被付候はて不被相濟儀彼是引合候ては莫大之儀にて可有御座御並方も有之儀御家作等強而御省略被仰付候様にも難相成事にて可有御座候へは一途被相調候御用銀調達可被仰付段勿論之儀と被相考候然處此度之御類焼脇々様よりも定而於大坂調達可相成候へは三家其外も脇々御出入先彼是有之由に付方々え出銀なと仕候時は此御方之儀取分出精之所存有之候ても不任所存儀共も可有御座哉尤廣岡久右衛門事分而蒙御厚恩居候へは随分可奉遂其節其外いつれも入はまり候は、考之外輒調達相成儀も可有御座哉乍爾縮所近年之内御返濟無之候ては不相濟勿論御返濟之所掃り宜御引當等儘成儀を不承候ては御用立不申候右御返濟引當之儀は御家來中御馳走並地下御馳走計之儀は御家頼中近年別而差詰於趣は舊年委曲爰元におゐて被仰聞候通之儀此上重き出米引續被仰付候ては不相濟儀出來御厄害にも至り可申哉諸郡も近年早損打續是以餘分御馳走被仰懸候様難被仰付其上秋作毛上に應し技量相成事に候得は必定之御引當には不相成由然は於大坂只今大銀御借用相成候ても御

返濟一種相滯候得は忽江戸御仕送を始及差聞候段眼前に付御當分を第一にして御調達も難相成然共員數總にて當分難被相調候ては是以甚不相濟御大切之境付進退被及御當惑候此度之御作事何卒四五年之内追々成就仕候様被仰付候道共は有之間敷哉左候は、調達銀も追々にて輕重相交被召上候時は手之下及破候儀も無之相調候道も可有之哉種々被盡御僉議候へとも外に格別御存付も無之先は右之通被仰越之由委曲致承知及御聞候處御當惑尤之儀思召候御考之通脇々様之御並も有之御家作御延引は難被爲成候故御住居御手細隨分御造作入少様被仰付候御思召にて態と梨羽頼母方をも被召登節格其詮議被仰付仕調御道具等も緩急之差別被相立御有掛りよりも可成程は愈末成る品にて被相濟との御事にて御省略筋無御疎御事御座候然共諸色別而高直に付御入用は大段之儀と相見候凡之積り申付福原與三左衛門え申含差下候間疾御承知可被成存候被仰越候様御家頼中其外年來逼迫之儀に付此上御馳走等被召上候様には難被爲成儀と思召候條外之御趣向隨分御吟味相成被仰伺候は、御歸城之上御仕

組筋何分可被仰出との御事に御座候

一御國中在町御當用先年御類焼又は御手傳其外數度被仰掛候へ共利付或は利無し年賦等にて悉御返濟相成候寶曆四年之御當用より以來は少々御返濟相成分も有之候得共先は滞りかちにて相縮候ては餘程之銀高御返濟未相成候一體近年市中在々共に差詰義餘分之御當用被仰掛若出銀不得仕ものも有之候ては御威光も不相成儀に付御僉議の上市中諸郡にて銀六百貫目之御當用御沙汰相成候由

一御用銀都合之處難被相考に付於大坂關達之員數極而被仰越候様難被爲成候へ共此内高杉又兵衛方え直様申越候銀五百貫目之道付其外差掛御入用も可有之に付平七武藤孫右衛門え被仰合被差越平七儀は爰元えも被差越候付孫右衛門事致滞坂高杉又兵衛申談候様被仰付候何卒二千貫目程も關達相成候へかしと思召候由

一御撫育方え廣岡久右衛門一家より此内差出候銀子利分年延等之御手段共は有

之間敷哉御所帶至而御問之儀に候へは責而御撫育方にて成共御甘き有之度儀に付右爲手段下村彌三右衛門大坂被差登御用銀關達筋之儀も孫右衛門又兵衛申合候様被仰付候由廉々致承知及御聞候處別而御苦勞之儀彌無御油斷御心遣候様可申入之旨御座候

十八日公歸國暇ヲ賜フ

廿四日井原孫左衛門若中地加判ヨ乘物幕府へ申請許可アリ

廿五日世子夫人歸邸ニツキ幕府へ申告左ノ如シ

今般中屋敷同氏壹岐守居宅類焼付壹岐守妻徳川大藏卿殿え火除仕是迄滞留仕候處今日麻布屋鋪引越申候依之御届仕候以上

明和九辰年四月廿五日

松平大膳太夫

廿六日異國拔荷検査ニ關シ發令アリ其文略大目付同狀

同日記録所役山名宇右衛門後房裏老兼務ヲ命ス公儀人小幡源兵衛ニ記録所役ヲ命ス

五月二日將軍へ端午時服帷子單物二獻セラル

九日柱彦右衛門ニ後房頭人役ヲ命ス

十三日公滯府申告左ノ如シ

私儀國元え之御暇被仰出候付早速發足可仕と奉存候處從先頃持病之癩痛差發其上動氣眩暈仕此節別而不相勝難儀仕候依之保養仕快候は、早速發足可仕候此段御届申上候以上

五月十三日

御

名

十五日毛利讃岐守病アリ滯府ヲ願フ

同日中島助右衛門都濃郡代官暫役ヲ命ス

廿四日用所役田中九郎右衛門ニ御長屋頭人役ヲ命ス

六月七日公病未タ癒ヘス秋期迄滯府養生出願允許アリ

十日家作ニ茅屋板屋ヲ禁シ瓦葺蟬殼葺ト爲サシメ向後ノ火災ヲ戒ム令文略大目付

同狀

同日去年三月二十一日渡邊助右衛門妻子ヲ携へ弘法寺參詣途中渡口ニ於テ村上平藏ノ暴行ヨリ紛擾ヲ生シ格闘ニ及フ審問ノ結果平藏給米沒収助右衛門隠居其他同行人處罰アリ

廿一日大目付同狀左ノ如シ

先達而大火之節御櫓御門々其外燒失に付右之所々御普請有之付ては御手傳等可被仰付之處打續早魃私領損毛も有之其上大火にて類燒有之且御手傳御用等相勤間も無之御人少にも候處御用捨御手傳之御沙汰に不被及御入用にて御普請被仰付候事

右之趣萬石以上之面々え演說有之候様可被致候

六月

同日櫻田麻布及中屋敷營作ニ關シ訓示左ノ如シ

今度櫻田麻布並御中屋敷共三屋敷御家作被仰付候太段之御普請肝要之儀付諸事御爲宜被遂其節候當時御勝手向御不如意之御事候へは御造佐入不逮過分様

可有心遣候尤當御地之儀候へは表方之儀見若敷様有之候ては難被相濟事候間
作事御内外上中下之仕法を以御差圖被相極候條其勘辨有之隨分其僉議肝要可
有其沙汰候此段役人中並棟梁共えも能々可被申聞事

一御作事方其外役人中末々之者迄御作事奉行申付所不及違背遂其節候段勿論候
是又右勤を甲乙無私曲可被申出候事

一御座敷廻り依其所御手作事被仰付其外之儀は大概請負方に可被仰付候條其心
得を以可有沙汰候尤請負入札之儀落札之上は脇よりいか程下直に可仕と申出
候共必其落札之者え被仰付事候然は入札被申付候者其人柄身上共慥成所兼而
閉合御出入之外に而も廣く入札可被申付候家職筋違候者之儀は入札之人數え
相加被申聞敷候事

一御差圖前棟數多之事候間廉々にて委細前積能々可被申付候請負に申付候處に
ても此方之前積入札之銀高に引合勘考候而可有其沙汰事

一諸材木繩竹釘鐵物其外共於仲取方買方之儀隨分途吟味候儀肝要之事候尤於
御作事方請拂之仕法就中釘鐵物等之締り能々可被申付候是又請負方之仕方請
負候者え任せ置候ては甚以不宜候間役人並棟梁共節々見分無緩様可被申付候
事

附諸材木御國木追々仕送をも被仰付儀候間於爰元御買上之木其心得を以能
々吟味候様棟梁共え可被申付候事

一兩御屋敷棟梁並添棟梁共夫々申付候御作事之儀は棟梁之心得肝要之事候條入
はまり御爲宜敷遂其節候様可被申聞候太段之御作事御家數多分の儀候間其
節右之内引分猶手はり候時分は御國町大工之内にても其場所々々引請棟梁所
見合被仰付宜儀も可有之候兼而其段可被申聞候事

附御國大工を初其外諸職人此元被召登候儀は太段之御作事數多之職人目當
にも相成事候間其心得を以面々相嗜別而相勵緩せ不仕様可被申聞候事

一日々諸職人日出を限り會所相集御作事に取付晚は七半時を限り仕廻候様可有
沙汰候然は御作事場役人並立肝煎共に至迄先達而罷出仕役不及遲滯様可被申

付候事

附町職人爲日用御門出入之掃り仕役人別之改念を入可被申付候請負方之大

工日用不令混雜掃り能様兼而之仕方可被定置候事

附諸職人晝飯休等之儀も常々之趣とも違ひ大段之御作事數月之儀候へは少

宛之刻限にても御費之儀候間相改程能可有沙汰候

一大段之御作事其數月日數を經申事候へはおのつから怠慢出來可申候條面々緩

せ無之様可被遂其節候事

附足輕以下手子付立肝煎之者迄も大切之御作事此時之儀にて別而無緩相勤

候様連々氣を付可被申候事

一御出入之諸町人其外共町方より之音物一切請引不申段は勿論之儀御用被仰付

候町人之所にて茶たはこ之外請候儀被相制儀候へは改て被仰聞迄も無之事候

へ共彌役人中並未々迄不令違犯様堅可申聞候此度之儀大段之御作事之事候へ

は手筋を以手入頼入之趣有之候ても聊御役筋無忘却清廉之心得可爲肝要事

一重き御作事肝要之時節候條役人中別而令一和於御用筋は随分是非を争ひ筋宜

令落着全不存遺恨穩便之心得勿論候然は就御用候ては縦令面々私之意趣有之

當分堪忍難成儀と候共兼而被仰出之旨有之儀候條其場延引難被閣儀は追而及

沙汰候様能々可被申聞候惣而役人中銘々誓紙取置可被申候事

一火用心之儀常以肝要之儀就中御作事場取らし數多之人數入込申事候間役人

中は勿論立肝煎之者迄面々身に引請念を入候様度々可被申付候尤御作事場火

之元一所々々に相定多葉粉も日之内時分を相定一所にて給候様町職人共えも

可被申渡候日々諸職人相仕廻候以後夜中え懸り別而念を入度々見分可被申付

候事

右之通候條被得其意役人中えも能々申聞可有其沙汰候以上

辰六月

佐 六郎左衛門

井 孫左衛門

梨 頼母

廿三日將軍家ヨリ吾世子夫人へ奉文ヲ以テ看下賜暑中尋問ノ爲ナリ

七月朔日麻布屋敷晝夜回番仕法改正訓示アリ其文略

六日日野市正ニ大組頭役ヲ命ス柳澤新右衛門後任ナリ

八日ヨリ九日ニ至ル幸松丸君興元公嫡大永三年七月十五日卒去九歳二百五十回忌秀岳院ニ於テ法會

修セラレ

九日毛利伊豆家臣長井亘人伊豆病ニ關シ直目付山縣平兵衛宅へ直訴ニ及フ審問ノ

結果亘人ヲ逮捕シ流刑ニ處ス詳細ノ記録アリ長文ヲ以テ略ス明和九年ヨリ安永二年迄諸事小々控

廿六日財政困難ニ關シ在府吏員ニ對シ訓令左ノ如シ

年來御所帶御不如意にて年増行詰至而御難溢の期に至り候に付追々地江戸御仕組被仰付隨分御儉約之御吟味を被盡漸御取渡相成候處近年御手傳被蒙仰候以來種々臨時之御造佐入被差湊且々其御繰出も被相調候へ共夫たけ根之御借銀彌増相定る御物成にては餘分御不足相立既去年分ノ御積御仕組以前え立戻り勿論追々御吟味をも被盡たる事候へは此上一向御仕組之絶手段候趣遂一地方より申上

相成別而御氣遣被思召御歸城以後は格別之御吟味を以根に入候御仕組被仰付候間其内先右之心得にて諸事取計候様にと去秋諸役人中被召出御直に委細被仰聞候通候處不被思召寄當奉御類燒にて諸御道具金銀等に至迄不殘燒失夫に付ては御當分より之諸御造佐入第一御殿を始其外新御作事一途之御入目且御道具仕調等に至迄莫太之御入用銀御繰出難溢至極にて決て難相調左候迎いつれも被捨置候様不相成儀根之御勝手向は前斷之通彼是去秋被仰聞候節之趣にても無之甚御氣之毒之御事候縱令右一途之御入用可成に相調候迎も根之御所帶及破候ては第一公邊御勤并御役人方其外無嫌外向え懸り候御入用御内輪にては肝要上々様方御積方次には御家來中御扶助等一向不相調段は眼前之儀寔御家御安危之境至而大切之期に差懸り候然は右一途御取戻之御工面は此上御仕組之吟味被仰付改而非常之御儉約被相用候外無之夫に付ては萬端上御不自由をも御堪忍被遊諸事質素過候取捌をは隨分可被遠御了簡との御事に付諸役人中末々迄も前件之譯與得令勘辨品に寄流例古格を聞御儉約筋之儀日夜擬評議且々も被相調候様御爲能遂